

令和2年度 第2回埋蔵文化財担当職員等講習会

—発表要旨—

文化庁

令和3年2月3日（水）

令和２年度 第２回埋蔵文化財担当職員等講習会 日程

【令和３年２月３日（水）】

10:30 ～ 10:35 開会挨拶 鍋島 豊（文化庁文化財第二課長）

10:35 ～ 10:45 趣旨説明 埋蔵文化財保護行政における保存と活用
—埋蔵文化財を地域に活かすための第一歩—
川畑 純（文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門）

10:50 ～ 11:35 講 義 1 埋蔵文化財を活かしたブランド戦略
大竹 幸恵（長野県長和町教育委員会）

11:35 ～ 13:00 ≪休 憩≫

13:00 ～ 13:45 講 義 2 埋蔵文化財を地域コミュニティーに活かす
亀田 直美（東京都西東京市教育委員会）

13:55 ～ 14:40 講 義 3 埋蔵文化財を楽しんでもらうための取組み
—人口減少が著しい飛騨市で文化財を活用する意義—
三好 清超（岐阜県飛騨市教育委員会）

14:50 ～ 15:35 講 義 4 埋蔵文化財を広め親んでもらうための取組み
近沢 恒典・原 栄子（宮崎県都城市教育委員会）

15:45 ～ 16:45 パネルディスカッション「埋蔵文化財を地域に活かすとは」

16:45 ～ 16:55 まとめ 近江 俊秀（文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門）

16:55 ～ 17:00 連絡事項等

目 次

講 義 1	埋蔵文化財を活かしたブランド戦略 大竹 幸恵（長野県長和町教育委員会）……………	1
講 義 2	埋蔵文化財を地域コミュニティーに活かす 亀田 直美（東京都西東京市教育委員会）……………	1 3
講 義 3	埋蔵文化財を楽しんでもらうための取組み —人口減少が著しい飛騨市で文化財を活用する意義— 三好 清超（岐阜県飛騨市教育委員会）……………	2 5
講 義 4	埋蔵文化財を広め親んでもらうための取組み 近沢 恒典・原 栄子（宮崎県都城市教育委員会）……………	3 5

埋蔵文化財を活かしたブランド戦略

大竹 幸恵（長野県長和町教育委員会）

1. 「星糞」という名の黒耀石

その名も「星糞峠」という地名が残る長野県小県郡長和町の森の中で、縄文時代の鉱山ともいえる大規模な黒耀石の採掘址群が発見されたのは、平成3年のことである。「星糞」という名称は、江戸時代の頃から「黒曜石」の別称として知られていたが、峠の地名としてその名がついた時期については、まだ詳しいことはわかっていない。里に住む地元の人は、「あの山の峠には、空から降ってきた星のカケラが降り積もっている。」と子どもの頃に聞いて育ったそうである。星のカケラとは、黒耀石の採掘に伴って廃棄された夥しい量の割屑のことである。そして、集落遺跡のある里の地域では「お天道さまのハナクソ」とも呼ばれ、畑仕事には障害となるものとして礫や土器などと一緒に畑の隅に追いやられていた。黒耀石原産地のお膝元ならではのことであるが、まさに、そこら中に落ちているこの「星糞」が、遠い昔に人々のあこがれの対象となっていたことなど、知る人は少なかったようだ。

遺跡の発見は、森林地帯を対象とした広域分布調査に伴うものであった。リゾート法の公布により、まだ十分に黒耀石の産出状況が解明されていない国有林を含む広大な森林地帯に、ゴルフ場をはじめとする開発計画が浮上したためである。同様に、峠の麓では昭和59年の町営スキー場建設に伴う発掘調査を契機に実施された分布調査によって、旧石器時代の濃密な鷹山遺跡群の分布が捉えられ、星糞峠の一带は、長和町の黒耀石3万年の歴史を象徴するエリアとしてその後も継続的な調査が行われてきた。平成13年には研究拠点として明治大学黒曜石研究センターが峠の麓に建設され、平成15年には、調査・研究の成果を活用し、遺跡の保存を担う機関として町立の黒耀石体験ミュージアムが建設された。そして、国の史跡に指定された星糞峠の鉱山には、30年間に及ぶ調査の成果を公開する黒耀石鉱山展示室「星くす館」がこの夏に開館する。史跡公園、研究所、博物館を一体のものとして存続させることは、人口6000人にも満たない小さな町では異例なことであるともいえよう。ここでは、その要因として身近にある「星糞＝遺跡」が「町の宝」として認識されてきた経緯を紹介したい。



和田峠直下の三の又沢で確認された黒耀石を含む87万年前の白色火砕流

2. 遺跡の発見と活用への期待

長和町の黒耀石原産地の遺跡としては、男女倉遺跡群や鷹山遺跡群の学術調査が昭和 30 年代に実施される。これらの調査は、群馬県岩宿遺跡の発掘調査によって日本列島に旧石器時代に遡る人類の歴史の存在が証明されたことを契機に、長野県下では諏訪市茶臼山遺跡の発掘調査に次いで行われたものである。大規模な黒耀石原産地遺跡群として著名な男女倉遺跡群では 3 ヶ年に渡って信州ローム研究会による学術調査が実施された。学界の第一人者が相次いで訪れた調査の様子は当時の新聞に大きく報道され、黒耀石に係る歴史遺産について地域住民の関心が急激に高まった時期でもある。当時の様子を知る男女倉地区の方の話では、厳しい開拓作業の合間に拾い集めた形の良い石器を先生方に提供し、自分たちが生活する静かな寒村にどんな人々の賑わいがあったのか、胸をときめかしたとのことである。また、新聞では、調査に訪れた大学関係者の繋がりから寒冷地に強い種籾がもたらされ、地域の念願であった水田耕作が実現するという事も遺跡の調査がもたらした成果として大きく紹介された。

しかし、この調査の後、遺跡を訪れる人の姿は次第に減り、当時の調査の様子を知る人も少なくなっている。町全体の過疎化が深刻化する中、男女倉地区は限界集落として今後の在り方を模索している。小規模な農道改良の工事に伴って行った緊急調査では、教育委員会が発掘資料の保管を巡って権限移譲の説明会を開催した。住民の意見は「必ず活用するということを約束してくれるなら、町に委ねる。」という内容であった。耳の痛い話であるが、男女倉地区は国道 142 号線新和田トンネルに通じる高架道路で集落が分断され、遺跡の濃密な包蔵地として埋蔵文化財保護法に「縛られ」、それでも地域の歴史として協力する気持ちは持っているが、その研究と活用を担う者の責任を問いたいという指摘である。



新和田トンネル料金所付近に設置された男女倉遺跡包蔵地の石碑（平成 8 年）

* 広報の記事に掲載された石碑建立の経緯を知る人も少なくなっている。

3. 根気のいる埋蔵文化財の任務

文化財保護法は昭和 25 年に公布される。しかし、全国の行政組織が遺跡の調査と保存・活用の体制を整えるに至るまでには、地域によって大きな格差があった。相対的に開発行為が少ない山間部では、それぞれの自治体に担当者を抱えることは稀なことである。昭和 30 年代という早い時期に学術調査が行われ、全国的にも脚光を浴びた黒耀石の原産地でも同様であり、幹線道路の改良工事や圃場整備に伴う緊急調査は、近隣の研究者の協力によって対応するという状況が続いた。旧長門町が正式に埋蔵文化財の専門職員を配置したのは、平成 2 年のことである。広大な黒耀石原産地の一帯にリゾート法による大規模な開発計画が検討され、また、過疎対策として進んできた農地の構造改善が、遺跡の立地形を大きく改変する山間部側に進んだためであった。

埋蔵文化財の専門職員の配置は、町の文化財行政に大きな転換を迫るものであった。黒耀石の原産地から離れた身近な生活圏の中にも、大小様々な遺跡が数多く存在することを再認識することになったからである。そして、当然のごとく、その調査と保存のためには時間と予算の執行が伴う。町における緊急調査の多くが公共事業に伴うものであることから、「遺跡の保護と調査の必要性」について直接、住民を対象に説明する機会が増えていった。中山間地域の過疎化が進行する中で、希少な町の予算は必須と考えられる福祉や医療に、そして、主たる産業である農業の後継者を確保するためにも農地の基盤整備によって農作業の機械化や生産性を高めることが最優先とされた。埋蔵文化財の保護は、日常生活に直結する事業に対峙する関係に置かれがちである。

町にとっては初めての専門職員の配置。そして、担当者自身も社会の中で様々な角度からの問いかけに答える経験は、もちろん初めての事である。その意義を理解してもらうには、どうしたら良いのか。自問自答の毎日が始まった。男女倉地区の住民を対象として説明会を開いたのは、それから 30 年ほど経過した、ごく最近のことである。集落の住民を代表して、鋭い指摘を投げかけた方は、調査が行われた昭和 30 年代には、まだ小さな子どもであったはずである。普段から目にはしていた黒耀石のカケラに新しい命が吹き込まれ、身近な大人たちがいつもと違う話題に花を咲かせている。遠い昔の遺跡の発見がきっかけで、この地域の未来について語り合う人たちがいる。遺跡に向き合う真剣なまなざしと、相手の立場に立って耳を傾ける姿が、調査隊を快く受け入れた背景にあったようである。子ども達は、そんな当時の様子を覚えていたのだ。

スポーツリゾート構想に伴い、男女倉地区に先駆けて遺跡の分布調査が行われた鷹山地区では、昭和 59 年にスキー場の駐車場予定地であった原産地遺跡群の全面保存が決断された。その理由は「おらがムラの祖先様の歴史を無下にもできない。」という素朴な思いであった。遺跡の存在は地域開発の足枷とも見なされていた。そんな中での開発計画の見直しと遺跡の全面保存は、「小さな町の勇気ある決断」と報じられる。地域の歴史遺産である遺跡はみんなのものであり、その遺跡を守ることは地域の誇りにもつながる。この遺跡を「町の宝として活かす」という目標が課せられた。しかし、この事を契機に、新たに原産地の遺跡群が密集するエリアとして注目され、分布調査が始まった鷹山地区でさえも、遺跡の保護と活用という課題を容易に受け止められた訳ではない。その後の継続的な調査や博物館構想は、定期的に会合がある鷹山地区の集会所に足を運び、担当者の顔を覚えてもらうことからのスタートであった。

文化財の保護と活用の基本は、やはり人と人との繋がりにあるのではないだろうか。手探り

でありながらも、その地域の歴史を大切に思い、汗を流す姿を見守ってくくれる人がある。根気のいることであるが、互いの理解は説明に要する言葉だけではなく、継続するその姿を示すことではないだろうか。男女倉地区での投げかけは、その姿を見て寄せられた言葉でもあると受け止めている。

昭和33年(1958年) 10月4日 (土)

和田峠で喜びの稲刈り

考古学者らが激励

男女倉 部落 高冷地の悪条件克服

一家そろって稲刈り—和田峠男女倉部落で

和田峠に暮らす男女倉部落は、いまだかつて稲刈りの喜びを味わってこなかった。全般的に山に囲まれ、高冷地である。稲作は、この部落にとって最大の課題である。しかし、考古学者らの激励により、部落民は稲作に取り組む決意を固めた。部落民は、稲作を通じて、生活の安定と発展を期している。考古学者らは、部落民の努力を激励し、稲作の技術や知識を提供している。部落民は、稲作を通じて、生活の安定と発展を期している。考古学者らは、部落民の努力を激励し、稲作の技術や知識を提供している。

昭和 33 年

遺跡の発掘が縁で

五年前、本道から種モミ

和田峠男女倉部落で稲刈り—一家そろって

五年前、本道から種モミ。遺跡の発掘が縁で、部落民は稲作に取り組む決意を固めた。部落民は、稲作を通じて、生活の安定と発展を期している。考古学者らは、部落民の努力を激励し、稲作の技術や知識を提供している。部落民は、稲作を通じて、生活の安定と発展を期している。考古学者らは、部落民の努力を激励し、稲作の技術や知識を提供している。

昭和 38 年

＊当時の地元紙では、昭和32年から3ヶ年に渡って行われた男女倉遺跡群の発掘調査の様子と一緒に、調査団が住民の相談を受けて寒冷地に強い種籾を取り寄せ米づくりがなかったことが大きく取り上げられていた。

調査団と男女倉地区住民の交流を物語る当時の新聞

4. 記憶から消えつつある身近な遺跡の風景

男女倉地区と同様に、調査に伴う説明会では、どんな規制があるのかと身構える空気に反して、それぞれが知っている近所の遺跡の話になると、一変して様々な情報が行き交うという経験を持つ関係者も多いのではないだろうか。身近にある遺跡の風景を記憶に留めるということは、時を経て同じ空間に生活を営んだ人びとの存在に思いを馳せ、身近なふるさとの歴史として愛着を持つ貴重な要素のひとつである。このふるさとの記憶を大きく改変する事業が、皮肉なことに専門の担当者を配属することになった大規模な圃場整備事業である。

平成5年から4年間にわたって実施された圃場整備に伴う発掘調査は、新人担当者にとってまさに体力勝負であった。広大な面積に及ぶと予想された発掘調査の準備は、黒耀石の原産地で実施された広域分布調査と並行して行った。圃場整備が計画されているエリアの遺跡分布と基本地形を把握し、遺跡の広がりが予測される区画からその周囲へとトレンチを入れ、耕地の基本土層と遺構の密度を把握する試掘調査からの着手であった。知る人も少ない地域に単独で入り、試掘調査の予算も手探りである。本来ならば、技術や効率性を考えても専門家にお願いするところであるが、町としては担当者を置いての初めての事業でもあり、低予算でより多くの情報を得るために、担当者自らが地元の土建屋さんをお願いしてバックホーの練習と資格の取得に挑むという状況であった。

小さなバックホーを駆使してまで行った試掘調査の目的は、本来、基盤整備の設計者が把握する情報を考古学的な基本土層と旧地形の把握という視点から事前に捉え、設計や換地計画の段階で遺跡の消滅範囲を最小限に食い止める提言をするというものであった。対象エリアには、昭和30年代に中核的な耕地を中心として実施された構造改善の範囲も含まれており、すでに遺跡は削平されているという指摘もあった。しかし、当時の構造改善における工法からすると、農道や水路は基本地形に沿って設置されており、盛土された耕地の下半を中心に遺跡が残



圃場整備によって大きく変わった遺跡の景観（大門地区明神原遺跡）

されている可能性が高い。ところが、平成5年から実施されることとなった圃場整備の工法は、ブルドーザーからバックホーに機器の主体が移り、遺跡の立地を反映する小さな谷やテラスも根こそぎ消滅してしまうのである。遺跡の遺存状態を確認するとともに、設計調整による包蔵地の保護が必須と考えられた。

圃場整備の結果、起伏に富んだ山間部でも生産効率の良い耕地が生まれ、大型車両にも対応する農道は車社会の生活道路としての役割も果たすようになった。しかし、一方では、日常生活の中で目にすることが出来た土器や石器が落ちている山裾の畑の景観が、大量の土砂の移動によって大きく様変わりしていったのである。報告書に添付した地図には、畑にたどり着く道を探しながら行った試掘調査によって復元した本来の地形や、遺跡の範囲と圃場整備の範囲を重ね合わせた情報を盛り込み、地域の伝統的な景観や、場合によっては防災の指針ともなる記録として作成した。しかし、畑や田んぼのあぜ道を歩く人の姿も見かけなくなった今日、どれほどの情報が後世に引き継がれるのであろうか。

発掘調査に合わせて、普段は目に見えない埋蔵文化財の姿を知ってもらいたいと遺跡の説明会を開催することもあった。しかし、振り返れば、発見されたムラの姿を遺構や遺物だけで説明するのではなく、当時の、そして今に引き継がれてきた原風景として語り継ぐ工夫が不足していたのではなかっただろうか。遺跡の発見は、その都度、町の広報や新聞などでも紹介され、生涯学習の企画として見学会の要請を受けることもあった。しかし、調査終了後と同じ遺跡に立つことは少ない。圃場整備の設計変更によって大規模な構造改善から消滅の危機を乗り越えた遺跡も多い。厚い耕作土の地下に埋もれた遺跡を、「おらがムラの祖先…、町の宝として…」として守り伝えるためには、その存在を風化させてはいけぬ。地域のシンボルとして話題になりやすい黒耀石は「山の彼方」の出来事だと考える人も多い。しかし、その歴史の主体者は、里に移り住んだ「おらがムラの祖先…」なのである。遺跡に託された過去の記憶を、身近なものとして伝えるため、今、長和町では近所の遺跡を車窓から眺める巡回ツアーを始めたところである。



身近に息づく歴史遺産の存在を伝えるために開催したバスツアー

5. 町民憲章に登場した遺跡とまちづくり

平成 17 年の合併で誕生した長和町の町民憲章には、「私たちは 先人の築いた黒耀石の遺跡と中山道の宿場を誇りに 緑の山なみ 澄んだ空気 豊かな水を大切にし 活力のある明るい町にするため この憲章を定めます」とある。そして、町の歌「美しい町に住む人」の歌詞の中には「キラキラ黒く光る石は何だろう 長和の人ならばみんな知っている」というフレーズが登場する。「遺跡」という文字がまちづくりの象徴となる町民憲章に登場したのである。それまで、黒耀石はむしろ旧和田村というイメージが強かったが、星糞峠のある旧長門町と和田峠のある旧和田村が、共通する中山道と黒耀石という歴史遺産を合言葉に合併したともいえる。草稿作業に直接関わりがなかったため、担当者としては大きな驚きと感動であった。額に掲げられた町民憲章は、今後、埋蔵文化財をはじめとする歴史遺産をどのような形でまちづくりに活かすべきか、その道筋を探ることを課すものでもあった。

地域の歴史を象徴する黒耀石という存在は、傍目からは恵まれた素材を持っていると思われるだろう。しかし、著名なだけにその存在意義を誰しもが理解できる形で説明することは、先の埋蔵文化財の意義を説明すると同様に、予想以上にハードルが高いものでもあった。いざ活用の取り組みについて、文化財関係者だけでなく、幅広く意見を交わす機会を設けても、遺跡の世界は専門的であるとのイメージから、その魅力を聞かれてもうまく説明できないという声も多い。産地が限られている珍しいもので終わってしまうからである。この辺りでは、いくらでもある石ころが、何故、そんなにも大切だったのだろうか。そして、今を生きる人たちにとって、その価値とは何だろうか。

文化財をまちづくりに活用するというテーマでは、それぞれの地域に普遍的に存在する「歴史遺産」が自分たちの生まれ育った地域らしさや、自分自身が帰属するふるさとを大切に思う「アイデンティティ」を得る鍵を握っていると考える人も多い。しかし、街並みを構成する歴史的な伝統建造物や町の伝統的な行事として伝わる祭りなどと比較した際に、博物館等に展示された遺物や地下に眠る埋蔵文化財は、どのようにまちづくりやふるさとの「アイデンティティ」として認識してもらえるのだろうか。そのヒントは、小さなころから知っている、黒耀石が大好きだと言ってくれる子ども達との会話にあった。



役場の玄関に掲げられた町民憲章 ＊耀の文字は地域のこだわりである。

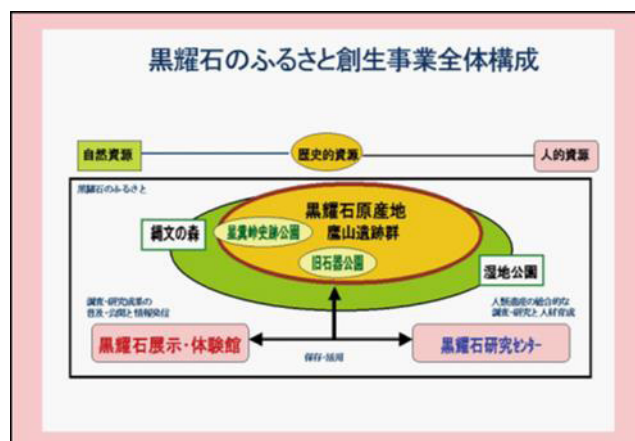
6. 廃校の利活用からスタートした博物館構想

長和町には、原始・古代ロマン体験館と黒耀石体験ミュージアムという二つの博物館がある。子ども達との交流の窓口となり、遺跡とまちづくりを繋ぐシンクタンクの役割を果たしているのが町の博物館である。平成4年に建設された原始・古代ロマン体験館は、当時の自治省が地域創生事業として行っていた『C & Cモデル事業』という補助制度を活用し、昭和の合併で廃校となった小学校の体育館を改造したものである。旧長門町では、はじめての博物館である。始まったばかりの圃場整備事業に伴う発掘調査と並行しての建設であったが、それは発掘が終了する前に文化財の活用をアピールすべきであると判断したからである。それまでも発掘調査後に地道な遺物整理の作業が行われていた。しかし、そのすべてを協力者に委ねていたため、その様子は住民や行政組織の中でもあまり知られていなかった。文化財の専門職員の配置や雇用が進まなかった要因の一つとして、予算の厳しい中、喫緊の発掘が終了すれば職員の配置は不要となるという考えがあったからでもある。

遺物の資料整理は、発掘の合間に物置となっていた旧庁舎の一画を間借りして行われていた。遺物整理の様子を目にした住民からも、その内容を広くアピールすべきだとアドバイスを受けた。小さく割れた土器片を接合して一つの土器が復元される。形になった土器は、大きな博物館で展示されていたものと遜色がないものである。「こんな過疎の田舎には、博物館に展示されているような土器や歴史は無いものと思っていた。」というのが、町の未来を模索していた青年の率直な感想であった。「もっとたくさんの町の人に、身近にある埋蔵文化財の魅力を伝えるべきである。そのためには、そのことを分かっている担当者が、各世代の町民と知り合いになって、その輪を広げていけば良い。」という助言であった。その拠点づくりが、博物館である。

体験型の博物館を企画した背景には、口コミで集まった縄文土器づくりに、様々な世代の方が集まり、近頃では目にすることが少ないと感じていた子どもと大人が一緒になって楽しむ姿を目にしたからである。担当者を含めみんなが初めて体験する縄文土器づくりや縄文バーベキューでは、マニュアルがある訳でもなく、自然と世代ごとに役割分担が生まれていった。発掘資料を見ながら銘々につくった土器。その土器を火で炙り、また、その土器でトン汁をつくり、黒耀石のナイフで肉を切る。遠い昔の人が残した遺物を、生活の道具として身近に感じる瞬間だった。楽しげに動き回る大人たちと共に、一緒に何かを担おうと走り回る子ども達の姿も印象的であった。その様子は、まるで縄文時代のムラの風景のようである。

縄文の集落が広がるエリアに設置された原始・古代ロマン体験館に対して、黒耀石体験ミュージアムは、黒耀石の原産地側に継続的な調査・研究を担う埋蔵文化財センターとして平成15年に建設された。ガイダンス機能としての展示や体験学習は、原始・古代ロマン体験館で開発したソフトをベースとしている。遺跡群が広がるエリアに研究所(明治大学黒耀石研究センター)と並ぶこの博物館は、「調査・研究が



続けられている遺跡に行くと、昔のことやその楽しみ方を教えてくれる人がいる。」という、原始・古代ロマン体験館が実施した遺跡教室の子ども達の提案に基づく『黒耀石のふるさと創生事業基本構想』に沿って建設されたものである。

7. 子ども達とともに保存・活用のキーワードを探せ

二つの博物館では、土器や石器という道具づくりの体験をとおして、遺跡から分かる生活の歴史について理解を深めてもらう取り組みを行っている。地域雇用と人材育成という観点から、体験の教材作成と企画の全てを多世代にわたる雇用職員で取り組み、体験の指導も担ってもらっている。体験型の博物館としては28年の歴史があり、現在は子ども達を中心として12,000人を越える体験学習の利用がある。

施設の立地としては、いずれも交通の不便な山間部である。黒耀石体験ミュージアムは、地元の小学校でも町所有のバスに乗って、半日がかりの利用計画となる。しかし、まだ小さい保育園の子ども達は原始・古代ロマン体験館に、社会科で町の様子を探検に出る小学校3年生から、山の上にある黒耀石体験ミュージアムへ足を運ぶようになってきた。そして、毎年5月の連休の合間にある登校日を利用して訪れる小学校6年生は、小学校の教科書には載っていない人類の誕生から旧石器時代、そして縄文時代へという歴史学習の授業を受け、その後に石器づくりの体験をすることになっている。

本物に触れ、遺跡を教室として学んだ小学生の感想には、大人の我々が学ぶべき重要な視点を見いだすことができる。小学生6年生のある子は、次のような感想を寄せてくれた。「人類の誕生から続く長い歴史を勉強した私たちは、世界のみんなが家族だったことを知りました。それなのに、現代の社会では戦争があります。家族同士で命を奪い合う戦争は、とてもおろかなことだと思います。」このような意見は6年生だけの意見ではない。この意見を聞いた3年生は、「そのお兄ちゃんの意見は正しい。」というのである。「僕もしょっちゅう家族喧嘩をするけど、仲直りすることが出来る。でも、戦争で相手が死んでしまったら仲直りできない。家族なのに仲直りできないのは嫌だ。」という理由からであった。

子ども達の言葉は、普段から耳にしている家族や周囲の大人たちの会話に相通じる内容である場合が多い。言い換えれば、率直な子ども達の意見を通して、地域社会の価値観や感じ方を知ることが出来るともいえよう。情報化が進む現代においても、人類の誕生から旧石器時代というるか遠い昔の出来事は、漠然と思い描くイメージの世界だったかもしれない。しかし、実存するものとして学んだ歴史事象の中に自分自身と家族を置き、そして、その未来について語ろうとする姿は、子ども達の背景にある社会との繋がりに思いを馳せることにも繋がる。このことは、まさに歴史学習の目指すところではないだろうか。

地元の子どもの達の質問で多いのが、「なぜ、この町で採れる黒耀石が、遠い地域まで持ち運ばれていったのか。」という問いかけである。この問いかけは、全国から訪れる黒耀石ファンの子どもの達からも聞かれる内容である。「天然ガラスの黒耀石は、切れ味の鋭い道具(石器)の原料として人気があった。」から始まる様々な理由を一緒に考えていく中で、子ども達の意見には鋭い内容も含まれていた。展示された石器を食いつくように見ていた小学校3年生は、「黒耀石をみんなに分けてあげた長和町の縄文人は心が優しかった。」という。そして、星箕峠の黒耀石鉱山を見学した6年生は、「互いに協力し合い、苦労して手に入れた黒耀石を分かち合うことは、1万年の間戦争のない平和な生活を送った縄文人の知恵だった。」と授業で作成



社会科の授業で博物館や遺跡を訪れる子ども達

＊見学のテーマは、縄文時代の地面から今日の長和町を眺めるでした。

した黒耀石新聞に意見をまとめている。

「埋蔵文化財、そして歴史遺産の価値とは何か？」繰り返し問われる質問であるが、地域の歴史遺産の価値づけは、単にその遺跡の希少性や規模を競うものではない。自らの疑問に答えようとして考えた子ども達の素直な意見は、身近な歴史遺産から、現代社会が抱える問題を変化させる訴えを導こうとするものであった。ここでは、そこら中にあるとされた黒耀石、そして遺跡の存在が、生活の歴史を身近な問題として置き換え、その在り方を広い視野から考え直すというきっかけになっている。遺跡にはそんな力が秘められているのである。

8. 遺跡学習と担い手づくり―「黒耀石のふるさと祭り」―

博物館が発信できる体験学習をはじめとした教育プログラムを総合的な学習計画の中に位置づけ、地域の歴史遺産を担う次世代教育に繋げるためには、地域の学校をはじめとする教育現場との連携が重要な鍵を握っている。黒耀石体験ミュージアムでは、中学校の段階で遺跡をフィールドとした「オブシディアン学習」に取り組み、歴史事象を解明するプロセスを学ぶ教科の横断的な学習を行った。

総合学習の時間を使って行ったこの授業は、先の小学生の発言に刺激を受けて中学校が動き出したものである。遺跡を学びのフィールドとして活用する取り組みは、社会科歴史だけでなく、様々な教科での知識を統合した授業となり、カリキュラムの最後に中学生が参加する「黒耀石のふるさと祭り」は、スタッフとして学んだことを自分なりの言葉や行動で社会に発信するという目的で行われた。残念ながら、現在はカリキュラムや授業時数の制限から、小学校の段階で学んだ基礎知識の再確認と「黒耀石のふるさと祭り」のスタッフとしての協力という集約的な形で実践している。しかし、この取り組みが始まった地元の中学校が廃校となった後も、祭りへの協力は統合先の中学校に伝統的な行事として引き継がれている。また、全国からも参加者が集うようになったこのイベントに、商工観光や特産品などの生産者の参加を呼び掛けたところ、初期の頃は、小学生や中学生が参加する教育的なイベントなので敷居が高いとされて

いたが、近年では、その垣根も低くなり、世代や業種を越えて黒耀石の魅力を体感する祭りとして定着してきた。当初 300 人ほどの参加であったこの遺跡祭りも、一昨年は 15 回目を数え、来場者 1000 人を超える祭りに成長しつつある。



プロセスを学ぶ歴史学習と地元の中学生在が支える「黒耀石のふるさと祭り」

9. 歴史遺産を活かした国際交流―「長和青少年黒耀石大使」―

現在、長和町では英国東部のセツフォードを中心とするノーフォーク州ブレッkland地域と「歴史遺産を活かした国際交流事業」を進めている。英国東部地域は黒耀石と同様に石器の石材として利用されていたフリントの産地であり、黒耀石の採掘址群と時代的にも並行して始まったフリントの採掘址「グライムズ・グレイブス遺跡」の景観は、その名が示す通り、採掘の痕跡がクレーター状に連なる星糞峠の特異な景観と類似している。

遺跡が取り持つ両地域の交流は、平成 24 年からノリッジ市にあるセインズベリー日本藝術研究所が窓口となって始まり、平成 26 年に両地域の博物館同士が協定を結んだ。そして、平成 27 年には市民も加わった国際交流実行委員会が発足し、博物館を窓口とした両国の子ども達の交流が始まった。地域の歴史を象徴する黒耀石を一つのテーマとして活動する「長和青少年黒耀石大使」の制度は、中学 3 年生から博物館との距離が生じはじめる高校生を対象としている。町の歴史や魅力を国内外で広報するという親善大使としてのミッションを担うため、町が渡航費の 4 分の 3 を負担し、公募制で行っている。

平成 28 年に結成された第 1 期の黒耀石大使はイギリスに赴き、黒耀石とフリントの鉱山（星糞峠とグライムズ・グレイブス）という遺跡の類似性から『双子遺跡』の協定を結び、当地で開催された学会の冒頭でふるさとの歴史を英語で紹介することになった。プレゼンの内容は、小学生・中学生の頃に学んできた旧石器時代からはじまる町の歴史と遺跡に込められたメッセージを自分たちが選んだ言葉で伝えるという構成になっている。先人のメッセージとして彼らが選んだ言葉は、最初に遺跡に出会った時に抱いた素朴な疑問や感動を彼らなりの言葉で表現したものである。自分たちが学んだことを異なる言語で表現するという取り組みは、理解の内容を客観的に見つめ直すということにも繋がったようである。現在、第 3 期生が、シーボルトの持ち帰った「ホシクソ」と書かれた黒耀石を追い、オランダ経由でイギリスに向かうという計画で研修を行っている。先輩である第 1 期生のアドバイスによると、国際交流で最も大切だと思ったことは、その時の語学力ではなく、身近なことをどれだけ理解しているかという事だそうである。この地域の特色となる黒耀石の歴史を、身近な集落に生活していた家族の視点から捉え直した彼らのメッセージは、緊張しながらも胸を張って笑顔で表現できるものであった。歴史遺産を活かした国際交流への取り組みは、教育基本法の改正に沿って実施することになったものだが、この「学びと発信の経験」は、身近なふるさとの歴史からより広い視野に立った人と人との繋がりに目を向けさせるものであり、これからの人生においてもその耀きは失われないものであると信じている。地域のブランドとは人と未来を繋ぐ存在なのである。



イギリスのフリント鉱山から



英語で石器づくりのワークショップ

埋蔵文化財を地域コミュニティに活かす

亀田 直美（東京都西東京市教育委員会）

はじめに

埋蔵文化財は土地に付随している。それ故、「地域」や「地域コミュニティ」との関係を考えずに進むことはできない。埋蔵文化財担当職員は多かれ少なかれ、地域コミュニティと向き合い様々な課題に直面していることと思う。

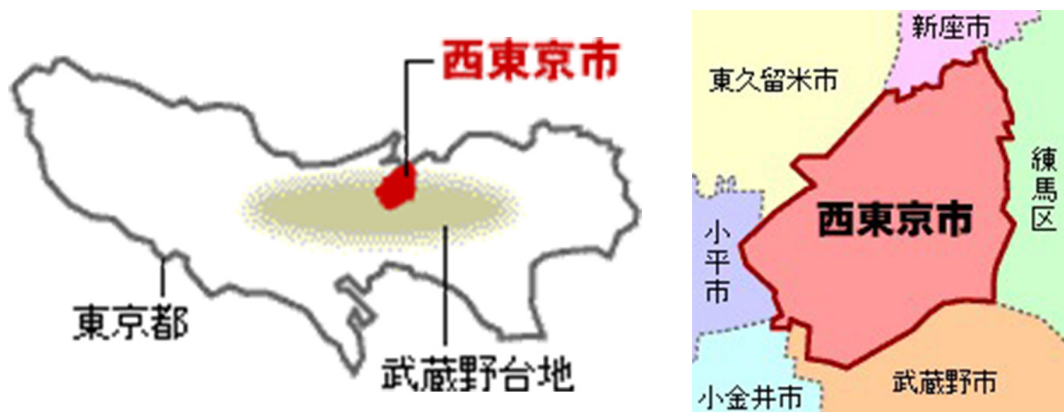
ここで紹介する事例は、なんら特別なものではなく、今では、多くの自治体が同様の試みを行っていると思うが、その積み重ねが国史跡指定という実を結び、また新たな課題が現れてきている。その道筋を振り返りつつ、地域コミュニティとの関係について共に考える場としたい。

1. 西東京市の概要

西東京市は平成 13 年 1 月 21 日に旧保谷市と旧田無市が合併してできた東京都内では最も新しい市であり、先月 20 周年を迎えたばかりである。

面積は 15.75 k m²で、人口は合併当時 180,885 人だったものが、平成 29 年 3 月に 20 万人を超え、令和 3 年 1 月 1 日現在 206,047 人と微増している。

武蔵野台地のほぼ中央北寄りの多摩地域東部に位置し、東は 23 区（練馬区）、北は埼玉県新座市が隣接する。新宿から鉄道で 30 分圏内の都市部にあるが、都市農業や屋敷林の緑が比較的多く残り、「武蔵野」の景観がある、住みやすいベッドタウンとして発展してきた。



西東京市の位置

2. 西東京市の歴史文化

市域の標高は 47 ～ 68 m で、武蔵野台地の中では湧水の沸きやすい地点に当たり、また地下に水のたまる地下水堆が多く存在することが、古くから地質学者吉村信吉の研究などで知られている。このような環境から、石神井川、白子川の源流付近にあたり、この二本の河川が市域を東西に横断して流れている。両河川流域には旧石器時代や縄文時代の遺跡がみつかり、その一つが後述する国史跡下野谷遺跡である。

縄文時代の後期から弥生、古墳時代にかけてはほとんど人の姿を追うことができないが、中

世になると前述の河川や地下水堆による湧水付近に初期集落が現れる。さらに近世になると、江戸幕府の政策により、上水路と交通網が整備される中、市域にも玉川上水、千川上水が整備され、また青梅街道の宿場町として田無宿ができる。さらに吉宗の新田開発などにより、蘆原だった景観は、田畑と屋敷林などの雑木林のひろがる「武蔵野」（国木田独歩）に代わっていく。こうして、のちの保谷市、田無市の母体となる4ヶ村、江戸の近郊農村としての上保谷村・下保谷村・上保谷新田と、宿場を有する田無村が成立するが、これらの村々はそれぞれ異なる歴史的、宗教的背景を有し、西東京市の文化の多様さ、地域の隔たりを生み出している。

その後、第2次世界大戦中は軍需工場も多くでき、また隣接する武蔵野市には零戦のエンジンを製作していた中島飛行機武蔵製作所があったことなどの影響もあり、多くの被害も受けたが、戦後は、新興住宅地の代表ともされたひばりが丘団地などができ、ベッドタウンとして発展を遂げてきた。

市域にはこれらの歴史文化を語る文化財が、周知の埋蔵文化財包蔵地14か所、国・都・市指定・登録文化財が58件ある。そのうち国指定文化財は、史跡玉川上水、史跡下野谷遺跡、名勝小金井（サクラ）の3件あるが、西東京市が単独で所有、管理しているのは史跡下野谷遺跡のみである。

表1 西東京市の文化財

	有形文化財				無形文化財	史跡	名勝	天然記念物	計
	建造物	絵画・彫刻・工芸品	古文書	歴史資料	民俗芸能				
国指定	0	0	0	0	0	2	1	0	3
都指定	1	0	0	0	0	0	0	0	1
市指定	2	9	4	29	2	2	0	2	50
国登録	4（9）	0	0	0	0	0	0	0	4（9）
計	7（12）	9	4	29	2	4	1	2	58(63)

※国登録文化財の（ ）内は登録文化財である建造物を棟数でカウントした場合の件数。

※市としては登録文化財制度をもっていない。

3. 国史跡下野谷遺跡

下野谷遺跡の概要

下野谷遺跡は、西東京市東伏見にあり、石神井川最上流域の台地上に位置する旧石器時代から縄文時代、近世、近代の複合遺跡である。遺跡全体の面積は134,000㎡で、特に縄文時代中期には径150mを超す環状集落が東西2か所形成された南関東最大級の集落遺跡である。

勝坂式期から加曽利E式期を主体とする縄文時代中期後半から後期初頭の約千年にわたり継続したと考えられる集落跡からは、大量の縄文土器をはじめとした遺物や住居址などの遺構が検出されている。土坑群を囲み竪穴住居と掘立柱建物が建つ典型的な環状集落の構造をもつ。

北側の段丘崖下を流れる石神井川とそれに続く広い低地（縄文時代には沼地だったと考えられる）と集落が形成された台地との高低差は現在約7mあり、水場に近い日当たりのよい高台といった縄文集落の立地を良く示している。曾利式土器など甲信越の土器も大量に出土しており、他地域との交流も密であったと考えられ、遺跡の規模や複数の集落が隣接する双環状集落

の構造から、地域の拠点となる集落であったと考えられている。

遺跡は西武新宿線東伏見駅から徒歩 17 分程度、青梅街道にも一部面する文教地区の閑静な住宅街にある。

東西二つある環状集落のうち、東集落跡地にはマンションや企業の自社ビル、大学の施設などがすでに建ち、遺跡が消滅している部分も多い。しかし、その分、記録保存調査による考古学的データは蓄積されており、下野谷遺跡の考古学的価値を担保している。一方西集落は、都市計画上、低層住宅専用地域に指定されていることや、つい最近まで農地として利用されていたこともあり、大規模な開発は行われておらず集落の全域が保存されている。後述するように、内容確認のための試掘調査がおこなわれ、東集落と同時期の環状集落の存在が明らかになっており、東集落の成果を援用しつつ研究を進め、遺跡を物理的に保存するといったことが可能だと考えられる。

このように、都市部において典型的な縄文時代の大規模拠点集落を全域保存できることは稀有であること等から、西集落を国史跡に指定し遺跡の保護を図ることとした。

史跡下野谷遺跡の本質的価値

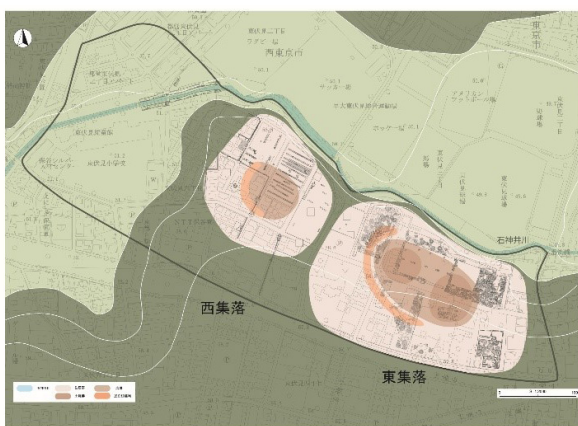
- ① 典型的な構造が明らかな大規模環状集落
- ② 縄文時代中期における南関東最大級の拠点集落
- ③ 縄文集落の立地を明瞭に示す
- ④ 隣接する東集落と双環状集落を構成する
- ⑤ 都市部において良好な遺存状態を保つ大規模集落遺跡

4. 下野谷遺跡の国史跡指定と西東京市の文化財行政（表2）

遺跡の発見と市民の声

戦前から、縄文土器などが多く出土し、遺跡の存在は予想されていた。昭和 25 年に吉田格により「坂上遺跡」の名称で文献に紹介されてはいるが、実際に初めて本格的な発掘調査がなされたのは昭和 48 年のことである。この最初の発掘調査が、当時、遺跡周辺にも迫ってきた都市開発の波の中、遺跡の保護を考える地域住民や研究者が遺跡の内容を知りその価値を周知する必要性を訴えた声により実現した手弁当の調査であったことは、特筆すべきことであろう。

その後も、数次にわたり同様の調査が続き、縄文時代中期の環状集落の存在が明らかにされ



下野谷遺跡全体図



第 19 次調査 遺構検出状況（東集落）



第 19 次調査 出土土器

表2 下野谷遺跡のこれまで

昭和48年	第1次調査（将来的な手立てを考えるための保存目的調査）実施。 →関東では有数の縄文時代遺跡と推定。手弁当の調査！
昭和50年	第3次調査実施。旧石器時代遺構・遺物の存在が明らかになった。 →以後、旧字名に照らし、「下野谷遺跡」と名称変更。
昭和58年	第5次調査（遺跡の範囲確定のための保存目的調査）実施。 →東台地上にも遺跡が広がることが明確に（後に明らかになる東集落）。
昭和63年以降	早稲田大学校地整備（第6次調査）マンション建設（第7次調査）など、民間開発による発掘調査が多く行われている。 →関東でも有数の規模の大規模環状集落の構造が明確に。
平成12年	現在の遺跡公園の土地取得を、市民などが市に強く働きかける。→以後、遺跡の保存に関する陳情・要望書などが提出された。
平成15年3月	市民団体（下野谷遺跡保存協議会）がリーフレット『西東京市の縄文大集落 下野谷遺跡』を自費刊行。
平成17年	平成16年以降の市の各種計画を受け、遺跡の一部公有化・公園化。 →「西東京市史跡公園整備懇談会」発足。
平成17年	遺跡公園用地購入（一部は関東財務局より貸与）。 3,190.5㎡（市有地 2,115㎡・財務省 1,075.5㎡）。
平成17年12月 ～平成18年1月	遺跡公園予定地にて、内容確認のための第14次調査実施。 →公園予定地が西側集落の主要部分であることが明らかに。
平成18年4月	遺跡公園築造開始
平成18年	学校教育や公民館事業等の下野谷遺跡を意識的にとりあげ始める（「縄文サークル・したのや」などの市民応援団が生まれる）。
平成19年4月	下野谷遺跡公園開園。
平成19年10月	第1回縄文の森の秋まつり開催（参加者約100名：参加団体8）。
平成20年5月	第1回縄文のムラで春風と遊ぼう開催（以後継続 現在12回実施）。
平成21年3月	第20次調査実施。→西側集落も「環状集落」となること、集落が良好に遺存することを確認。＝下野谷遺跡全体を評価できるデータが揃う。
平成22年5月	市文化財保護審議会が、市指定史跡とする案件を提出することを確認。
平成22年6月	将来的に、都・国指定史跡を目指すことに方針を変更。
平成22年8月	東京都教育庁に、国および都指定史跡候補として情報提供。
平成25年6月	市文化財保護審議会より市に文化財保護に関する建議が提出。
平成25年6月	市民、学生、専門家、行政の複合研究チーム「下野谷圧痕倶楽部」始動。
平成25年10月	国史跡指定に向けた文化庁との本格的な協議の開始。
平成25年11月	西東京市文化財保存・活用庁内検討委員会を設置・開催。

平成 26 年 2 月	文化庁・学識経験者による現地視察・検討会開催。 平成 26 年度の施政方針として、下野谷遺跡の国史跡指定に向けた調整を行うことを表明。
平成 26 年 3 月	下野谷遺跡の国史跡指定に向けた取組を組み込んだ西東京市総合計画、教育計画が策定される。
平成 26 年 5 月	学識経験者による下野谷遺跡調査指導委員会を設置・開催。
平成 26 年 7 月	都を通して国へ「下野谷遺跡」の史跡指定についての意見具申書を提出。
平成 26 年 11 月	国の文化財審議会 答申。
平成 27 年 3 月 10 日	官報告示により正式に国史跡指定。
平成 27 年 3 月	国史跡指定記念式典。 地元の地域型スポーツクラブが作った「したのや縄文体操」のお披露目。
平成 27 年 5 月	教育委員会教育部社会教育課に文化財係発足。
平成 27 年 8 月	専門職員（学芸員）の正規採用。
平成 27 年 9 月	「中学生による縄文まちづくり提案」ワークショップ開催。
平成 27 年 12 月	第 1 回国史跡指定シンポジウム開催（以後 3 年間 3 回開催）。
平成 28 年 3 月	第 1 回追加指定（以後毎年追加指定と遺跡用地の公有地拡大を実施）。
平成 28 年 3 月	第 25 次調査（史跡内での確認調査開始。以後継続して実施）。
平成 28 年 3 月	まちづくりワークショップで提案された「縄文給食」実施。
平成 28 年 3 月	西東京市文化財保存・活用計画策定。
平成 30 年 3 月	史跡下野谷遺跡保存活用計画策定。
平成 29 年 8 月	北杜市との交流事業実施。
平成 30 年 3 月	VR 下野谷縄文ミュージアム完成。 アプリダウンロード開始。
平成 31 年 3 月	史跡下野谷遺跡整備基本計画策定。
平成 31 年 3 月	西武新宿線東伏見駅ロータリーほかに縄文モニュメント設置。
令和元年 7 月	史跡下野谷遺跡 1 期整備工事基本設計、実施設計策定開始。
令和元年 10 月	第 13 回縄文の森の秋祭り（参加者約 900 名：参加団体 27）。
令和 2 年 8 月	史跡下野谷遺跡第 1 期整備工事開始。
令和 2 年 8 月	第 35 次調査（史跡整備のための調査）。
令和 2 年 10 月	新型コロナ感染拡大防止のため縄文の森の秋まつり中止。



したのやムラの「しーた」と「のーや」
©T&K / 西東京市

下野谷縄文ミュージアムの鳥瞰図とアプリの QR コード

た。1990年代以降は開発による大調査が続き、それにより南関東屈指の大集落の様相が明らかになっていったが、前述のように、東集落の一部は消滅していった。

そういった中、西集落の一部に開発を前提とした土地の売買の話が持ち上がる。その際、市内の郷土史研究などに関連する複数の市民団体が連帯し保護に向けた声をあげ、市は、平成17年に遺跡の保存と活用のために土地を公有地化し、平成19年「下野谷遺跡公園」が開園した。

活用事業の展開と史跡指定

このように、遺跡の保護を求める市民の声が存在する心強い状況ではあったが、それは一部であり、下野谷遺跡の一般的な認知度は研究者間でのそれに比べ、非常に低かった。そこで、まずは、遺跡の周知を目的として、平成18年頃から築造中の公園で体験発掘を行ったり、公民館と連携した体験学習、市民協働で縄文まつりを行うなど積極的に活用事業を実施してきた。特に地元の商店会、小学校とは積極的に交流を進めた。それと並行し、遺跡の内容確認調査や未整理遺物の整理等を地道に実施し、遺跡の考古学的な価値を高めていった。

その中で、遺跡を史跡に指定することで保護すべきであるといった気運が次第に生まれていった。平成21年に行った西集落の内容確認調査である第20次調査で、西集落が東集落同様の大規模環状集落であることが確実となり、遺跡全体の評価がほぼ定まったことで、平成22年には東京都教育委員会宛に、国および都史跡指定候補地として情報提供を行った。遺跡の活用事業は市民などの力を借りて続け、平成25年度からは文化庁の「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業（現名称）」などの補助金も利用し事業を展開した。さらに市の計画にも正式に下野谷遺跡を位置づける必要を感じ、平成26・27年の2ヶ年で国の奨める歴史文化基本構想の理念にのっとり「西東京市文化財保存・活用計画」を策定することとした。

平成24年度からは総括報告書の作成に向けた再整理も開始し、遺跡の価値を明らかにしつつ、住民への周知を図り、理解を得ながら行政内での足場も固め史跡指定に繋げていく計画をたてていたところ、平成25年夏に突然、西集落の範囲内において土地の大規模な売買・開発等を含む案件が発生し、市は西集落保護のために国史跡指定を受ける方針を決め、文化庁、東京都ならびに土地所有者との協議を急ぎ進め、平成27年3月に国史跡の指定を受けるに至った。

その後は、各種計画の策定、追加指定を進め、令和2年度から第1期史跡整備工事に着手している。

史跡指定と史跡整備の課題

史跡指定までに急を要し、地域住民への説明、話し合いの時間が十分に取れなかったことが、行政と一部の住民との間に溝をつくる原因になった。

また、史跡下野遺跡の保護の意義は、縄文時代中期の環状集落全体を守り、将来につなげる点にあるため、集落全域を史跡として指定することがのぞまれる。しかし、



下野谷遺跡公園現況



指定記念式典には、駅前の道に小学生が作ったフラッグが揺れた

すでに個人住宅が建ち並ぶ住宅街では、指定当初から全域の保存を望めるべくもなく、公有地化も視野に、史跡指定への同意、追加指定を計画的に継続していく必要がある。部分的に拡大する公有地は、住宅地としての景観に影響を与えるだけでなく、既存の地域コミュニティの解体を意味する場合もある。

さらに、整備においては、住宅地における市民生活の環境をより良くするものであるべきで、安全面や、見学者が日常生活に与える影響への配慮など、様々な問題が上ってきている。

改めて、都市部における遺跡保護の課題の多さを痛感することとなった。

史跡指定と西東京市の文化財行政

西東京市の文化財行政は合併後も旧田無市、旧保谷市の文化財行政を引き継ぐ形で行われてきた。両市ともに文化財係が置かれてはおらず、教育委員会の社会教育課などがその役割を担ってきた。文化財の専門的な知識をもつ職員は嘱託職員である文化財保護専門員1名のみで、埋蔵文化財だけではなく、建造物、民俗文化財、文献資料等も含む文化財全般に関わる業務を行っていた。このような状況は西東京市に限ったことではなく、都内の他の自治体でも多く見受けられる。文化財係の設置や正規の専門職員の配置、博物館等の施設の整備、設置などについては、合併以前の両市ともに、文化財保護審議会などを通じて強く要望されてきていたが、実際に文化財係が設置されたのは下野谷遺跡の国史跡指定後である。史跡指定に向けて「西東京市文化財保存・活用計画」が策定されたことも合わせ、いかに史跡指定が市の文化財行政の大きなターニングポイントになったかがわかる。

令和2年度（附属機関・計画は史跡下野谷遺跡に特化したものを除く）

主 管 課	教育委員会教育部社会教育課文化財係（文化財係は平成27年5月1日に新設）
職員体制	係長1名、主査1名、主事2名（うち学芸員採用1名 平成27年8月1日採用） 文化財保護専門員（嘱託職員）1名、文化財指導員（郷土資料室担当 嘱託職員）
関連施設	西東京市郷土資料室（2市合併に伴い両市の文化財を合わせて収蔵、展示する暫定的な施設として平成14年開室。統合により閉校した小学校施設を利用した総合教育施設内に設置。）
収蔵施設	郷土資料室に付随する旧教室、倉庫、置き型コンテナ倉庫、小学校の空教室などに分散して収蔵。
付属機関	西東京市文化財保護審議会（7名：委員の主な専門分野 考古学2名、建築・文字資料・中近世史・郷土史・学校教育 各1名）
条 例	西東京市文化財保護条例 平成13年 制定
計 画	西東京市文化財保存・活用計画 平成28年3月策定

5. 下野谷遺跡の保存と活用

下野谷遺跡の保護における基本的な考え方

～縄文から未来へ したのやから世界へ～
～みんなでつくる、つなげる都市部の縄文空間～

下野谷遺跡には前述の本質的価値に加え、市民等協働による遺跡の保存と活用の有効な方法論の構築、地域コミュニティとの共存、市街地における遺跡保護といった現代的な課題を克服

する場としての価値があると考えている。

遺跡の保護では、国民共有の財産である史跡の本質的価値を構成する要素を確実に保存し未来に継承することが重要であるが、加えて、遺跡の持つ多様な価値や魅力を顕在化して広く社会に示し、現代につなぐことで文化や人の心を豊かにしたり、地域活性化や地域連携を推進することも重要である。これらは遺跡保護の意識醸成につながるものであるが、このためには、多くの人々が、様々な形で遺跡とつながることで、遺跡を「自分事」として捉えることが重要である。それが、市民協働での遺跡の保存活用事業を実施する大きな意義の一つと考える。

また、開発の進んだ都市部における遺跡の保護にあたっては、長期的な視点での国、自治体の計画的な保護が、より必要となる。また、地域コミュニティとの関係では、地域の多様なニーズを知り、課題解決の一つの手立てになることが望まれる。また、今後は土地を軸とした既存の地域コミュニティとの共存に加え、遺跡を核とした新たなコミュニティとの関係の確立が必要になってくるように考える。

都市部における遺跡の保存や整備には、住宅密集地であることによる課題もある一方で、人口の多さは多様な興味、関心を持つ人々の存在や、遺跡と関わることでできる人の多さにつながる。また、遺跡への国内外からのアクセスの良さ、研究機関や多様な施設等が周辺に多く存在することなどは、遺跡の活用において大きなメリットである。そういった中で、土地ではなく遺跡を核とした新たなコミュニティが成立し、それが既存の地域コミュニティに良い意味での刺激を与えるような仕組みを考えることが重要になるかもしれない。

このように、下野谷遺跡は、今後増加していくであろう、都市部にある遺跡をどのように保存、活用、整備していくかといった課題や方法などを考える「都市型の遺跡保護」や「コミュニティとの新たな共存」のモデルとなりうる遺跡なのである。

このことを踏まえ、平成 30 年 3 月に『史跡下野谷遺跡保存活用計画』を、令和元年 3 月に『史跡下野谷遺跡整備基本計画』を策定しており、保存と活用のコンセプトに「縄文から未来へ したのやから世界へ」を、整備のコンセプトに「みんなでつくる、つなげる都市部の縄文空間」を掲げ、保存・活用・整備の基軸としている。

下野谷遺跡の活用例

下野谷遺跡が史跡に指定された背景には、遺跡の歴史的文化的価値はもちろんのこと、保護のために発掘調査の必要性を訴え実践した人々や、遺跡公園の開園に尽力した人々などの市民活動があったことは前述のとおりである。それは遺跡の活用事業においても同様である。

行ってきた事業は、特段目新しいものではないが、実施にあたっては、できるだけ市民をはじめ様々な主体と連携を図ることを目指した。遺跡が遠くにあるものではなく、自分たちの暮らしの中に息づくものであることに気づくことを願ってのことであり、遺跡保護の応援団を増やすためでもあった。地域コミュニティを主としつつ、応援団を幅広く持つことは、非常に大きな力となり、今に至っている。

以下に主な取り組みについてまとめる。

①市民協働の下野谷遺跡の普及活動

下野谷遺跡公園や郷土資料室などを会場として様々な普及事業を開催している。

その中でも「縄文の森の秋まつり」は、これまで 13 回開催され、スタッフの数の方が来場者より多かった初期の段階から、今では 1000 人近い来場者を迎える地域の目玉イベントに成長した。地域の商店会、旧自治会、市民団体、ボランティア、学生などが運営スタッフ

として参加し、火おこしや弓矢などの体験コーナー、遺物展示、ステージ演奏などを行っている。

また、講演会やシンポジウムを継続的に実施している。その際の運営には市民や大学生が活躍している。特に、下野谷遺跡の国史跡指定を記念して行った3回のシンポジウムのうち第3回には発表者として市民にも登壇を願い、市民協働の研究、活用の実践例を市民目線で報告してもらった。

下野谷遺跡には公式キャラクターとして、遺跡名から名付けた「したのやムラの『しーた』と『のーや』」があるが、これも市民の方のデザインによる。こういった、応援団の力が、史跡指定ならびに史跡の保護に大きな役割を持っている。

②学校教育や生涯学習との連携

担当課が教育委員会にあることから、学校教育や生涯学習での活用は重要であり、理解も得やすい。未来を担う世代に下野谷遺跡の価値を伝えるため、郷土資料室への団体見学受け入れや、市内小中学校での総合的な学習や社会科（歴史）等への出前授業などを積極的に行うとともに、小学校の副読本に下野谷遺跡に関するページを盛り込むなど、学校教育の現場と連携し、下野谷遺跡を生きた教材として活用するための取組を行っている。

史跡に近接する小学校では、下野谷遺跡の特別授業や郷土クラブの新設、下野谷遺跡の出土遺物も展示した「東伏見歴史館」の児童の手による開設のほか、運動会や展覧会などの学校行事において下野谷遺跡を題材とした作品作りや発表を行うことにより、児童だけではなく保護者や地域への周知を図る取組を行っている。歴史館の開設には地域の人々も加わっている。

令和元年度には、郷土資料室に近接する小学校が、下野谷遺跡を題材に西東京市のPRを行う総合学習を1年間にわたり実施した。下野谷カルタや下野谷ソングの作成には保護者も加わり、世代をつなぎ遺跡に接する機会を提供する機会にもなった。

また、日本語と英語で下野谷遺跡の説明を記したクリアファイルを作成し、ふるさとを英語で紹介する中学校の英語の授業に利用するなど、歴史教育以外にも活用している。

『史跡下野谷遺跡保存活用計画』の上位計画でもあ



秋まつりでの旧自治会ブース



秋まつりのオープニングを飾る
地元の地域型スポーツクラブの
「したのや縄文体操」



土器作り教室と郷土資料室での
総合学習の発表。
手前が「したのや縄文カルタ」

る『西東京市文化財保存・活用計画』の策定に当たっては、学校の協力を得て中学生が縄文遺跡を活用したまちづくりを考えるワークショップを実施し、その成果発表会を開催した。その際に発案された「縄文給食」のアイデアは市内小学校、保育園などで実施され好評である。

生涯学習の分野でも公民館や市民団体主催で、下野谷遺跡に関わる成人向け講座が開講されている。その取組の中から下野谷遺跡や縄文時代を学ぶ自主サークルが生まれ、「縄文の森の秋まつり」などの場で遺跡の普及活動等をしている。

③地域資源・まちづくりへの活用

地元商店会が市の開催する史跡の普及の事業に参加したり、地元商店会の主催事業においても地域の文化遺産として下野谷遺跡を紹介したりするなど、地域から下野谷遺跡を応援する取組が行われている。地元の地域型スポーツクラブが考案した「したのや縄文体操」は市のイベントだけでなく、街の盆踊りや小学校の運動会などでも活用されている。

また、地域の商店会等の協力のもと市内の商店が、下野谷遺跡をモチーフとした商品を開発、販売している。行政は、商店街にフラッグを設置したり、これらの商品を普及事業の中で紹介したりするなど連携し、地域資源として下野谷遺跡を活用する取組を行っている。

さらに、地域の魅力向上や新たな賑わいの創出を図るため、遺跡の最寄り駅である西武新宿線東伏見駅周辺から下野谷遺跡までの間に、まちのシンボルとして、出土した縄文土器や下野谷遺跡キャラクターのモニュメントを設置している。台座には、遺跡の概要やアクセスを表示しているほか、内蔵している音声ガイド装置により遺跡を多言語で解説するものとなっている。

モニュメントのある駅のロータリーには毎冬、地元商店会によるイルミネーションが施されるが、その中には竪穴住居を模した飾りつけなどもなされ、「縄文タウン」をPRしている。

④市民が参加する研究活動の実施

普及事業における連携の取組のほか、大学・研



「縄文まちづくり提案」発表会の様子と提案され、実現した「縄文給食」



最寄り駅ロータリーに設置されたモニュメント



縄文人も好きなクルミがおいしい「したのや縄文クッキー」

究者や市民団体と市とが協力し、下野谷遺跡から出土した土器を研究材料として最新の分析を行うなど、新たな価値や魅力を見出すための調査・研究面における取組も行っている。

平成 25 年から、下野谷遺跡の土器に残る植物などの圧痕を探し分析する活動を、専門の研究者、考古学を学ぶ学生、市民活動団体、行政担当者などで構成する合同研究チーム「下野谷圧痕倶楽部」を立ち上げ、継続して行っている。この活動による成果は、学会などでも発表されており、下野谷遺跡での植物利用にとどまらず縄文時代の有用植物の栽培化などの最新の研究テーマの解明に直接関わることで、遺跡への興味や愛着を深める機会となっている。

⑤様々な主体との連携

市域に所在する多摩六都科学館とは、共催でワークショップや企画展示を行っているほか、館独自でもプラネタリウムを用いて、後述する下野谷遺跡デジタルコンテンツを活用した「縄文人が見た星空」などのプログラムの上映や講演会を開催するなど、積極的に連携事業を実施している。

また、大学との連携も進めている。下野谷遺跡の発掘調査や出土遺物の整理には、考古学を学ぶ大学生が参加しており、実際の調査・研究の現場を体験する機会となっている。また普及イベントでは、毎年複数の大学の学生が運営側として参画している。

さらに、縄文時代の遺跡を有する他の自治体や団体との連携も進めている。例えば、西東京市の友好都市である山梨県北杜市には数多くの縄文時代の遺跡があることから、交流事業として北杜市に所在する遺跡の発掘体験事業を実施した。同時代の他の遺跡を知ることにより、改めて下野谷遺跡の価値や魅力を発見する機会となっている。

⑥下野谷遺跡デジタルコンテンツの作成

下野谷遺跡の価値と魅力をわかりやすく伝えるため、当時のムラの中にいるようなVR（バーチャル・リアリティ）映像や、縄文時代のくらしの解説・クイズなどにより楽しみながら学ぶことができる「VR 下野谷縄文ミュージアム」を制作している。



「下野谷圧痕倶楽部」活動状況。
土器片を1点1点観察しなおす。



下野谷遺跡のデジタルコンテンツと
コラボしたプログラムのチラシ



遺跡でタブレットを使用し、
VR 縄文ミュージアムを楽しむ様子

これらのデータは、内蔵したタブレットを 50 台用意し学校教育や生涯学習、イベントなどで活用している。駅前の地域施設で体験もできる。また、スマートフォン用アプリの無料配信も行っており、市のホームページなどからも簡単にアクセスできるようにしている。

⑦西東京市郷土資料室での出土品等の展示

西東京市郷土資料室では、下野谷遺跡から出土した石器や土器を常設展示し、本物の遺物のもつ魅力を感じ、学ぶことができる場としている。下野谷遺跡関連のワークショップ等のイベントや、土器などを携えた各所へのアウトリーチ活動も行っている。展示には市民が手作りしたものが多くあり、また、学校と連携し、学び発表する場としても活用されている。

6. 埋蔵文化財の保護と地域コミュニティ

ここまで、下野谷遺跡の指定の国史跡指定への道のりを含む取り組みを、主に遺跡の活用の観点から紹介してきた。今回いただいたテーマは「地域コミュニティに活かす」であるが、こうして振り返ると「地域コミュニティ」に「生かされてきた」ことが良くわかる。

当初は、下野谷遺跡を広く周知し、文化資源、地域資源としての価値に気付いていただき遺跡の応援団になっていただこうと積極的に地域コミュニティにアプローチしていたが、地域の力がその思いを越え、下野谷遺跡の価値を高め国史跡指定に繋げることが出来た。とはいえ、地域にある多様な側面にすべてプラスの面で合致しているわけでは当然なく、様々な課題の克服に右往左往しているのが実情である。

さて、遺跡の地域コミュニティへの価値は、東京都下の住宅街に位置する下野谷遺跡では観光やそれと結びついた経済活動と直接結びつくことはあまり考え難く、それよりも地域の独自性、そこにしかない宝と感じ、それと自分がつながりを持つことで自らのアイデンティティや地域のアイデンティティを確立するところに見出すものかもしれない。そんな大仰な言い方をせずとも自分や地域を楽しむ。その一つのツールとして遺跡がある、遺跡のある街の風景があるという形が望ましいのではないか。

新型コロナウイルスにより、はからずもオンラインを活用した生活が日常になりつつあることで、「地域」の在り方は変わってくるかもしれない。自分が属する「地域」をもっと自由に選択するようになる可能性もある。その時に、これまでにある「空間的な」意味での「地域コミュニティ」を越えた、新しいコミュニティが生れ、その一つに遺跡を核としたコミュニティが生ればよいと思うし、そういった試みをしたい。様々な形で遺跡につながる人がそれぞれの価値を遺跡に見出し、フィードバックすることで、「地域」にも新たな彩が加わる。それによって既存の地域コミュニティに属する人たちも新たな魅力に気づく。それらが、いつまでも住み続けたいまち、子どもたちがふるさとだと思えるまちづくりに繋がっていくことになれば、埋蔵文化財を地域コミュニティに活かすことになるのではないだろうか。そしてそういった価値を認める時にこそ、地域コミュニティは、埋蔵文化財を保護していこうと考えるのではないだろうか。

おわりに

まとめもなく、結論もない報告になってしまったが、現在まさに、このことで日々悩み葛藤しているところなので、ご容赦願いたい。おそらく多くの担当者が同様の悩みを抱え試行錯誤をしていることと思う。これを機にともに考える場を広く持てるようになれば幸いである。

埋蔵文化財を楽しむための取組み

ー人口減少が著しい飛騨市で文化財を活用する意義ー

三好 清超（岐阜県飛騨市教育委員会）

はじめに

「飛騨市の認知度向上」に資するため、文化財の本質的価値を地域資源の魅力として広く全国・世界に発信する。またそれに関わる人を増やす。これが飛騨市の文化財保護行政に求められていることである。この目的に達するため、埋蔵文化財の活用事業等では触れることを大切にしてきた。埋蔵文化財の本質的価値を知り学ぶ最も効果的な方法が、触れることと考えているためである。まずは「楽しむ」を入り口に、埋蔵文化財に触れる。すると感動が高まり、好きになる。そうすると、飛騨市の魅力の一つとを感じる方が増えていくと考えている。

本稿では、埋蔵文化財を楽しみながら活用する飛騨市の体制と手段の在り方を、人口減少が著しい当市で取り組む意義と共に紹介したい。

1. 飛騨市の文化財保護行政の政策方針

(1) 飛騨市の地勢等

飛騨市は、岐阜県の最北部に位置する（図1）。平成16（2004）年に古川町・神岡町・河合村・宮川村の2町2村が合併して誕生した。北は富山県、南は高山市、西は白川村に接する。総面積792.31km²であり、そのうち93%が森林、可住地域の標高差2600m、市域の大半が特別豪雪地帯という自然豊かな場所である。

(2) 飛騨市の人口動態

人口は現在2万4千人弱であり、高齢化率は39%に達する。令和2（2020）年2月、飛騨市は総合政策指針を策定し、今後の人口予測を示した¹。それによると、25年後の2045年には1万3千人に減少する。しかもその内容は、生産年齢人口や母親世代人口が今後も大きく減少するという深刻なものである。これら等のことから、当市は人口減少を止めることができないと考えている。また、この人口減少率は全国の30年ほど先を進んでいるため、「人口減少先進地」とも認識している。

(3) 文化財保護行政の政策方針

飛騨市は、この人口減少という課題に対し、そのスピードを遅らせる「積極戦略」と新たな課題に対応する「適応戦略」の両輪で対応すると、総合政策指針で謳っている。その戦略の一つが、飛騨市のファンを関係人口として増やす取組みである。

関係人口とは、総務省において、交流人口と定住人口の間に位置し、地域や地域の人々に多様に関わる人々と定義されている²。飛騨市では、この関係人口を取り入れるだけでな



図1 飛騨市位置図

¹ 飛騨市2020『飛騨市総合政策指針～人口減少先進地が示す人口減少時代の処方箋～』。

² 関係人口ポータルサイト <https://www.soumu.go.jp/kankeijinkou/about/index.html>（2021年1月7日確認）

く、「人・地域の双方にとって望ましい「内実」に着目した研究を、楽天株式会社、東京大学、水産研究・教育機構と共同で実施してきた³。ここでの実証研究を踏まえ、あらゆる分野でファン同士の交流やファンと市民との交流を図り、まちづくりに関わる仕組みを構築しているところである。このような飛騨市の政策方針の枠組みの中で、文化財保護行政としては、その本質的価値を地域資源の魅力として広く全国・世界に発信し、「飛騨市の認知度向上」に寄与することが求められ、筆者を含めた3名で担当している。

(4) 埋蔵文化財に関わる事業

市内に埋蔵文化財包蔵地は2021年1月現在341ヶ所を数える。国史跡1件、県史跡15件、市史跡49件が存在する。年間5件程度の試掘確認調査を実施し、数年に1回本発掘調査を実施している。報告書は15冊刊行してきた。

また、飛騨市の現在の市街地の成立は、中世から近世まで遡ることができる。このため、市民と関係の深い中世遺跡の調査研究に重点を置いており、史跡江馬氏城館跡の本質的価値を高める調査、飛騨国司姉小路氏城館跡の史跡指定を目指した調査を主要事業としている(図2)。

2. 2019年度までの活用事業

埋蔵文化財の保存と活用を担当する文化振興課では、3本の活用事業を軸とする。

1つ目は職員派遣である。依頼主と講座の目的を明確にし、考古資料に触れての小学6年生の社会科授業、保育園での縄文土器作り体験、史跡名勝・江馬氏館跡庭園での土塀塗り体験など、学習目標に応じたプログラムを実施してきた。なお当事業は市外の依頼にも対応している。

2つ目は市主催の歴史講座である。史跡江馬氏城館跡、飛騨国司姉小路氏城館跡を舞台にした「飛騨の山城へ行こう!」は、城館跡の現地で専門家から解説を聞くことができる講座で、好評を博している。飛騨国司姉小路氏城館跡は5城、史跡江馬氏城館跡は8城で構成されており、それぞれ委員会を設置して調査研究や整備事業等について指導助言を受けつつ事業を進めている。「飛騨の山城へ行こう!」は、各城館跡で進捗している調査研究を公開する場であり、参加者は最新の動向に触れることができる。

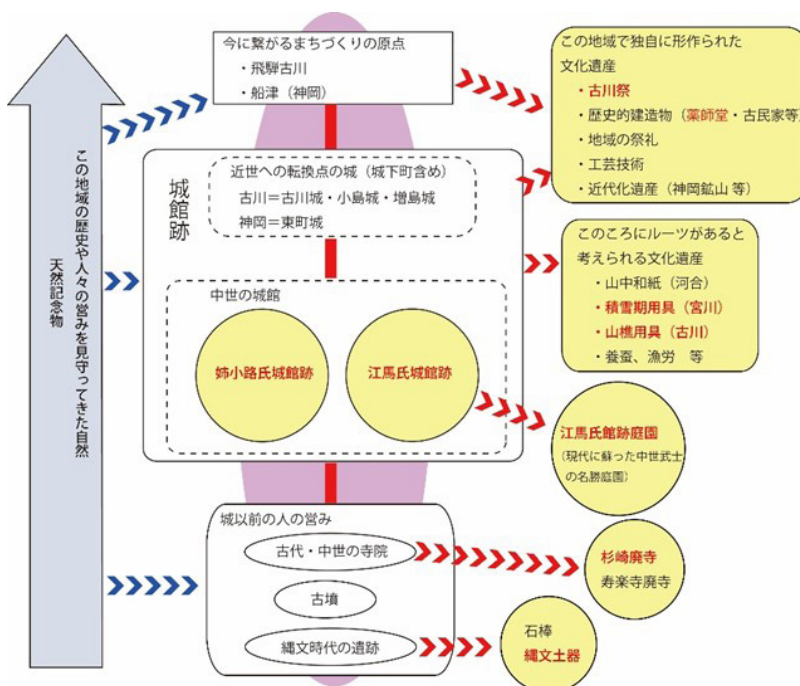


図2 飛騨市の文化財政策のイメージ図

³ 杉本あおい・杉野弘明・上田昌子・舩坂香菜子 2020「現代日本社会における「関係人口」の実態分析:全国アンケート調査の結果から」『沿岸域学会誌』Vol.33 No.3 日本沿岸域学会

また、高校生による地域研究の発信も行っている。2019年度は、県立関高校によるひだびと論争研究、県立斐太高校による安政大地震研究、県立古城高校による沢式土器と黒鉛の科学分析研究に協力した。11月の歴史講座「高校生が語る！」にて、高校生が講師を務めて市民に研究成果を発表した。会場からは、今の高校生が地域の歴史を熱心に調べていることを喜んでいる声が多く、高校生による地域研究が地域の元気につながると考えられた⁴。

3つ目は情報発信である。市では、文化財情報の発信に特化した飛驒市の文化財ホームページを平成30(2018)年より公開している⁵。国指定9件、県指定66件、市指定262件、国登録34件の文化財一覧表や、近年の発掘調査現地説明会資料など基本的なデータを掲載している。また、発掘調査報告書を検索・閲覧することができる全国遺跡報告総覧には、県内では岐阜県文化財保護センターに次いで平成25(2013)年度から参加した。令和2(2020)年9月からは文化財動画ライブラリーにも参加している。さらに飛驒市の文化財Facebook⁶・Instagram(#飛驒市の文化財)などのSNS、YouTube⁷を駆使して日々の調査活動等も公開してきた。市内に対しては、ケーブルテレビや児童生徒向け教材DVDにて映像配信も行っている。

以上のようなオンラインの取組みに加え、従来からの紙上での発信も続けている。令和2(2020)年に入ってから、飛驒みやがわ考古民俗館の活動報告⁸、史跡江馬氏城館跡での活用事業報告⁹、地元の県立古城高校との協働地域研究の在り方¹⁰などを発表した。市内については、今年度は広報誌に「文化の窓」と題した連載を行っている。

このように様々な媒体を駆使して市内外に情報発信している。これは、多くの方の目に触れて認知されることで、文化財の価値がさらに高まると考えているからである。一方で、文化財担当だけで調査、報告、発信、活用を行うには限度が生じていた。このような背景の中、関係人口を積極的に取り入れたのが飛驒みやがわ考古民俗館における石棒クラブの取組みである。

3. 関係人口プロジェクトとしての活動

(1) 飛驒みやがわ考古民俗館と石棒クラブ

飛驒みやがわ考古民俗館は、飛驒市宮川町塩屋に所在する。主に町内で収集した民俗資料約3万点、町内の発掘調査で出土した考古資料約5万点を収蔵展示する資料館である。民俗資料は豪雪地域での生活の知恵の結晶とも言え、2,800点が「宮川及び周辺地域の積雪期用具」として国重要有形民俗文化財に指定されている。考古資料は旧石器から縄文時代の遺物が当地域の特徴をよくあらわすとして、4件1,842点が岐阜県重要文化財に指定されている。これらに代表される民具や旧石器・縄文を語る貴重な出土品は、将来に伝えるべき文化遺産として適切に保存管理されてきた。また、合併後の発掘調査出土品は当館で収蔵しており、飛驒市の歴史

⁴ 三好清超 2020「行政機関と高等学校が連携した地域史研究の試み～飛驒市の事例～」『岐阜県立関高等学校地域研究部報告』第2号 岐阜県立関高等学校地域研究部

⁵ <http://hida-bunka.jp/> (2021年1月7日確認)

⁶ <https://www.facebook.com/hidanobunka/> (2021年1月7日確認)

⁷ <https://www.youtube.com/channel/UC44FfnOWjpoOHGDdQVbiUNQ> (2021年1月7日確認)

⁸ 三好清超 2020「飛驒みやがわ考古民俗館の抱える課題と解決への道筋」『岐阜の博物館』No.186 岐阜県博物館協会

⁹ 大下永 2020「飛驒市の文化財活用事例」『全史協会報 2020』全国史跡整備市町村協議会事務局

¹⁰ 三好清超・島田崇正・恩田知美・林直樹 2020「行政機関と高等学校が連携した地域研究の試み―岐阜県における官学連携の実践―」『日本考古学協会第86回総会 研究発表要旨』一般財団法人日本考古学協会

を学ぶ上では欠かせない存在になりつつあった。他方、合併後の中心市街地より 34km離れた当館では、僻地の集客力がない資料館という本来の役割とは別の課題に直面していたのである。

そのような中、平成 31（2019）年 3 月に、市内外に当館のファンを増やすことで飛騨みやがわ考古民俗館、ひいては飛騨市が存続する姿を模索する活動を開始する。友の会のような位置付けで、IT 企業・金融機関・建築士と学芸員とでプロジェクトチーム「石棒クラブ」を立ち上げた。活動は、当館で収蔵する塩屋金清神社遺跡・島遺跡出土の石棒が 1,000 点をこえるという事実を背景に、「全国に誇る石棒を中心に、関わる市内外の人を増やす」ことを目的とした。メンバーの出身地は、飛騨市 3 名、飛騨地区 1 名、県内 1 名、東京 3 名であった。

（2）ヒダスケで撮影した石棒画像を石棒クラブが公開

ヒダスケとは、誰でも飛騨市と関わるができる幾つものプログラムを案内している飛騨市関係案内所のことである¹¹。プログラムは、飛騨市内で存続させたいことを募集するもので、段々畑の石積みの修復、和紙作りなどがある。これは、人口減少や特定分野の専門性がネックになって行き詰まった事業等、市内の様々な困りごとが発端となっている。それに対し、地域にもっと関わりたい、自身の経験やスキルを地域に活かしたいという動機の人たちが市内外に存在する。ヒダスケは、このような市内各所で求められている人材と、ポジティブな動機を持つ人たちとの出会いの場を作っている。参加への返礼は、さるばるコインという飛騨地域で使用可能な電子地域通貨である。

このヒダスケで行っているのが一日一石棒である（図 3）。これは、塩屋金清神社遺跡で出土した石棒類 1,074 本を撮影し、ほぼ毎日 1 点ずつ Instagram（# 石棒クラブ）で画像を公開する事業である。公開終了に 3 年以上を要するため、年数回撮影会を計画し、撮影者を募集している（図 4）。撮影には誰でも参加可能である。資料の取り扱いについて学芸員が説明した上で石棒を撮影する。撮影した画像は、石棒クラブによる公開を前提とする。撮影の際にその石棒を最も特徴づけるカットは何かを参加者同士で語り合って交流が生まれている。



図 3 石棒クラブ Instagram での一石棒

冬季休業中の民俗館で 石棒 を一緒に撮影して くれるボランティア を募集しています。

日にち: 令和 2 年 2 月 8 日 (土)
場 所: 飛騨みやがわ考古民俗館
〒509-4533 岐阜県飛騨市宮川町 塩屋 104
時 間: 10 時 00 分 ~ 14 時 30 分
内 容: ① 残り 927 本の石棒を一本づつただひたすらにできるかぎり撮影する。(目標 200 本!)
② 撮影にきりがついたら、民具を使って外で雪遊びをする。
定 員: 2 名 (先着)
申し込み方法: 右記 Google フォームより
お申し込みください
2020.2.2 まで
<https://forms.gle/qd64x8M2MFD7wH777>
【注意事項】
・冬季休業中のため水を止めております。最寄りのトイレは
打保駅となります。(車で約 3 分)
・館内は大変寒いので暖かい格好でお越しください。
・お昼ごはんはみんなで飛騨まんが王国へ食べに行く予定です。(自己負担)
参加いただいた方には、飛騨のジビエ鍋を
ごちそうします!!
場所: やまなみ
岐阜県飛騨市宮川町
金町 11-24
時間: 18 時から
主催: 石棒クラブ、飛騨みやがわ考古民俗館 (飛騨市教育委員会)

図 4 石棒撮影の会のチラシ

¹¹ 飛騨市の関係案内所 <https://hidasuke.com> (2021 年 1 月 7 日確認)

4. 2020 年春期に全国でいち早くオンライン発信を実施

(1) オンラインイベント開催に至る経緯と方法

令和元（2019）年度終わり頃から、コロナ禍による学校休校、集会・イベント自粛などにより、職員派遣講座の依頼は無く、歴史講座も実施できない状況が続いた。このため、埋蔵文化財活用のために、別の手立てを準備する必要性が生じたのである。そこで利用したのが普段の石棒クラブ会議で使用していたテレビ会議システム Zoom であった。

大型連休中の 2020 年 5 月 3 日（日・祝）、Zoom を使って、飛驒みやがわ考古民俗館を舞台に、石棒クラブと共にオンラインツアーを実施した。計画に当たり、埋蔵文化財に「触れる」ことや普段の講座のように、参加者との一体感を構築する「相互交流」になるべく近づけることを目指した。

事業内容は、伝えたい内容が煩雑にならないよう、飛驒みやがわ考古民俗館の考古展示を切り取って解説することとした。解説事項は、館の特徴である旧石器から縄文時代の通史、飛驒市に関わる考古学研究史、石棒の製作工程の 3 点である。また、通常は入室できない収蔵庫の石棒も用いて、解説に厚みを持たせた（図 5）。

普段の出前授業やギャラリートークの際に、参加者との一体感の醸成・参加者間の交流が成否の鍵を握ると経験的に考えている。このため、発信側と参加者側の交流になりがちな YouTube や Zoom のウェビナー形式でなく、参加者間の相互交流も可能な Zoom のミーティング形式にて実施することとした。

さらに、発信側と参加者側の理解の距離を埋めるために、ゲストに雑誌「縄文 ZINE」編集長・望月昭秀氏と土偶女子・こんだあきこ氏をお招きして、随時質疑回答を行う形とした。チャット機能や Twitter にて参加者からの質問を、ゲストが考慮して発信側に質問することにより、参加者とギャラリートークに近い一体感を作り出すことができると考えたのである。

(2) オンラインツアーの効果

イベントには全国から 200 名もの参加申し込みがあり、飛驒市民や飛驒市出身者だけでなく、活動自粛を余儀なくされている縄文ファンも多く見られた。参加者とゲストとの質疑回答のやり取りだけでなく、参加者間の意見交流も活発にみられ、満足度は 97% に及んだ。特にライブ感・一体感があるという意見が多く、主催側の意図と一致したものとなった。さらに、テレビ 2 社・ラジオ 1 社・新聞 1 社など報道機関にも大きく取り上げられ、2 つの自治体等からも問い合わせがあった。このような反響は、オンライン相互交流を待ち望んでいた関係者や考古学ファン、博物館ファンがいかに多くいたかを示していた。このため、企画のために必要な資材やノウハウなどの情報はすぐに公開した¹²。



図 5 オンラインツアー、収蔵庫からの配信

¹² 三好清超 2020 「飛驒みやがわ考古民俗館におけるオンライン交流の実践」『歴史文化調査室報』第 2 集 飛驒市教育委員会

5. 埋蔵文化財のオンライン活用の展開

(1) オンラインイベントの展開

5月のオンラインツアーは大人対象であり、カメラの映像が鮮明ならなお良かったとの声が多く聞かれた。そこで、同年7月には「オンライン博物館クイズクエスト」という、小中学生レベルのクイズ形式で博物館を巡るオンラインイベントを実施した(図6)。映像の配信には一眼レフカメラを用いた。ここでは、石棒クラブのほか石棒等を研究する大学院生3名に協力してもらいクイズを出題した。参加者が楽しむという目的を達したものの、回答が知っているか知らないかに左右され、自発的に学びたいという思いを参加者に呼び起こさせることができなかった。

そこで、8月に行ったのがTwitter等のSNSを利用した石棒キャッチコピーである。ポスターにしたい石棒の集合写真を提示し、そこで自身が考えるフレーズを投稿してもらうこととした(図7)。縄文とは何か、石棒とは何かを考えてもらうきっかけにしようとの試みである。投稿は332件にも及んだ。

この頃から徐々に国内の移動が戻りつつあり、いかにオンラインと対面とを棲み分けしていくかを考える必要が出てきた。そこで、11月には「Go To タイムスリップ～文化財からサステナブルを考える～」と題し、石棒をテーマにした7つのイベントを行った(図8)。企画は、夜間にYouTubeにより講座と対談を配信し、日中にはバックヤードツアーを少人数で実施する等、現地とオンラインを組み合わせたものとした。

講座の一つは「石棒を3D化することの未来」と題した飛驒市長と文化財3Dの第一人者、筆者による対談である。収蔵資料の3次元データの取得と公開の考え方をテーマにし、市役所情報システム及び広報担当協力のもと、飛驒市公式YouTubeチャンネルで配信した(図9～11)。ここでは、3Dデータ化をヒダスケで行うこと、公開したデータは



図6 博物館オンラインクエスト



図7 石棒キャッチコピー



図8 Go to タイムスリップのイベント

商用・非商用に関わらず利用可能とすることに言及している。これは、3Dデータの公開により、埋蔵文化財の本質的価値を共有しやすくなり、より確実な継承につながるとの考えに基づいた発言である。動画は全国遺跡報告総覧の文化財動画ライブラリーでも公開しており¹³、公開10日で再生470回を数えた。

(2) 他機関との連携

11月のイベントでは、浅間縄文ミュージアム館長とのオンライントークイベントも実施し、64名の参加があった(図12)。また、唯一重要文化財指定の石棒を所有する東京都国立市にたち郷土文化館と、日本最大の石棒がある長野県佐久地域の佐久考古学会、石棒クラブの3者で、石棒総選挙を実施した。三者三様の石棒をSNSに投稿し、リツイート等で応援してもらう形とした(#石棒総選挙)。いいね、リツイートは延べ686を数えた。これらの企画では、発掘調査に関わる情報交換等だけではなく、新たな連携の可能性を見出すことができた¹⁴。

さらに、石棒クラブが主体となって公開している一日一石棒の画像を、展示パネルに使用したいと国立市にたち郷土文化館から申し出があった。飛騨市所有の石棒製作に関わる画像と共に、常設展示で利用されることになっている。



図9 「石棒を3D化することの未来」の配信



図10 情報システム担当による会場準備

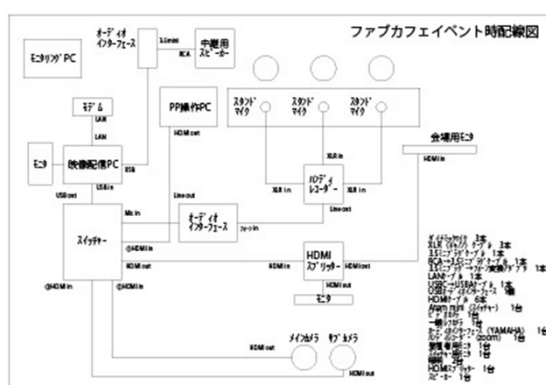


図11 情報システム担当による会場配線図

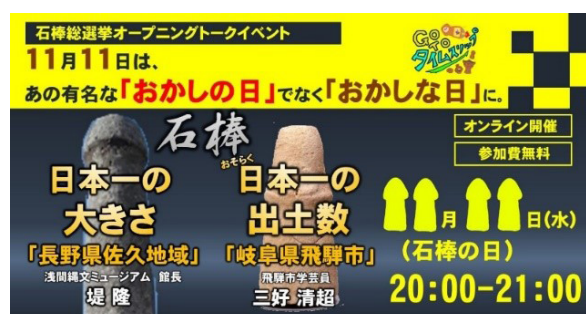


図12 11月11日、石棒トークイベント

¹³ https://sitereports.nabunken.go.jp/ja/searchvideo/item/317?pref_code%5B%5D=21&target_age=all_data (2020年12月25日確認)

¹⁴ 山城関連事業では、2019年度は岡山県古代吉備文化財センター、岐阜市、高山市、八王子市、東我妻町、福井県などで現場見学させていただいた。また、大分市、郡上市、関市、八戸市などからの視察を受け入れた。

(3) 3Dデータの公開と商用利用

令和2(2020)年秋には、(株)イビソク飛騨営業所の協力を得て、飛騨市教育委員会で石棒等7点の3Dデータの取得を行った。それを石棒クラブがsketchfabにて公開している¹⁵。このデータを、FabCafé Hidaが出力するサービスを開始した¹⁶。好みの石棒の3Dデータを選び、3Dプリンターにて1点2,200さるばばコインで出力することができる(図13)。これまでも様々な3Dデータを取り扱ってきた施設で活用されている例である。



図13 Fab Cafe Hida での3D石棒出力の様子

なお、筆者は当初、著作権に対する不安や埋蔵文化財を商用利用することに対して後ろめたさを感じていた¹⁷。しかし、先述したオンライン対談「石棒を3Dデータ化することの未来」にて、「埋蔵文化財に著作権は存在していない」「文化財保護法では埋蔵文化財の商用利用を禁止していない」などを飛騨市の認識として表明することとなった。筆者も現在は、誰でも平等に利用できる状態で文化財情報を公開することで活用の幅が広がるとの認識に至っている¹⁸。このため、今後は、写真撮影と同様ヒダスケを活用して3Dデータの取得と公開を計画している。

(4) オンライン活用により本質的価値を共有しやすくして確実な継承につなげる

決まった手法がないオンラインを駆使した発信は、計画—実践—反省—課題を踏まえてさらに実践、の繰り返しで現在に至っている。メリットは気軽に参加できることである。発信の継続により飛騨市の埋蔵文化財を身近に感じてもらうねらいがある。気軽にアクセスできる身近な存在になれば、文化財の本質的価値を共有しやすくなると考えている。

また、Fab Cafe Hidaのように飛騨市で公開しているデータ等は、誰でも利用可能である。これは、埋蔵文化財のデータが利用されるほど、飛騨市の認知度が向上すると考えているためである。さらに、高精細な文化財データの取得と利用が進めば、その本質的価値を共有するだけでなく、文化財そのものの保存につながると認識している。そのうえ商用利用にも供して経済的価値も付加することができれば、より一層持続可能な形で文化財を継承できるとも想定している。

このようなことを視野に入れ、埋蔵文化財データの自由な利用を前提に公開を進め、どのような人たちを誘引していくのかも見極めていきたい。

¹⁵ <https://www.sekiboclub.com/> (2021年1月7日確認)

¹⁶ <https://fabcafe.com/jp/hida/fab/fab-sekibo/> (2021年1月7日確認)

¹⁷ このことについては、以下で詳しく整理されている。

奈良文化財研究所 2020『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用2』- オープンサイエンス・データの長期保管・知的財産権・GIS - 奈良文化財研究所研究報告第24集、考古形態測定学研究会 2020『考古学・文化財資料とデータの公開・利用を考える予稿集』

¹⁸ 「遺跡を分かりやすく伝えるという点でもデジタルデータの積極的な活用が期待される」。文化庁 2020『埋蔵文化財保護行政におけるデジタル技術の導入について3』、16頁。

6. 既存の枠組みとの整理と今後の課題

(1) 文化財保護法に関連する整理

文化財保護法は平成 31（2019）年に改正法が施行された。その趣旨は、過疎化や少子高齢化を背景に、文化財の散逸等を防ぎ、「未指定を含めた文化財をまちづくりに活かしつつ、地域社会総がかりで、その継承に取り組んでいくことが必要」とされている¹⁹。

飛騨市では、関係人口を増加させることで市を存続させていく計画があると先述した。このため、文化財データの取得と公開においても全国の興味がある方々と協働で実施している。その結果、文化財を入り口にして飛騨市の認知度が向上し、文化財を維持管理する地域の存続にも繋がっていくと考えている。

このように社会総がかりで文化財データを共有して飛騨市の存続を目指す姿は、改正法で想定している「地域社会総がかり」より地域の範囲を広くとらえている可能性がある。今後も飛騨市らしい文化財保存活用地域計画を視野に入れ、今しばらく埋蔵文化財の保存と活用を実践して知見を蓄積していきたい。

(2) 飛騨市における人事評価制度に関連する整理

飛騨市では、職員が組織方針に基づいた施策を実施立案する中で、個人目標は数値を具体的に記入するよう指導されている。筆者もこれまでは、出前授業の開催数や主催歴史講座の参加者数を目標にすることがあった。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、対面での講座をこれまでと同じように開催できない状況がある。このような現況の中で、目標や評価のポイントが昨年度までと同様で良いのかという課題が生じている。

埋蔵文化財を活用した社会的インパクト評価の在り方として、何をどのように数値化して目標とするのか、達成率をどのように可視化し評価するのかを確立する必要があると考えている。未だ明確な方針を持っていないため、まずは他自治体事例の情報収集から始めたい。

(3) 地域研究と飛騨市ががんばれふるさと応援寄付金（以下、ふるさと納税）に関する整理

飛騨市では、国の定めるふるさと納税のルールに則り、市民の声を取り入れた血の通った事業に使う、寄付者の想いを取り入れる、寄付の使い道を明確にするとした上で、「日本一ふるさと納税をしてよかったと思っていただける自治体を目指す」と宣言をしている。文化財に関わる使途として、2019 年より飛騨みやがわ考古民俗館にある茅葺き民家の屋根葺き替え事業をメニューの一つとした。それに対し有難いことに 1,000 万円をこえるご寄付をいただいたところである。理由として、飛騨みやがわ考古民俗館を中心に情報発信してきたことに加え、合掌造り民家という分かりやすい飛騨市の文化財の特質に賛同いただいた方が多いのではないかと考えている。

これを埋蔵文化財に置き換えると、自分たちが得意とする地域研究を進める必要が高まると考えられる²⁰。つまり、飛騨市域の埋蔵文化財の特質を明確にして分かりやすく発信し、それに賛同して応援してもらう方々を増やす必要があると考えている。すでに史跡の保全や埋蔵文化財の保存・活用にふるさと納税を活用する自治体が見られる。飛騨市においても埋蔵文化財の保存と活用に予算を必要とすることは間違いない。そのためにも担当職員として調査研究と発信を継続し、それに賛同する方を増やす取り組みを進めたい。

¹⁹ <http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/1402097.html>（2021 年 1 月 7 日確認）

²⁰ 地域研究が重要であるという認識は、以下をはじめ、すでに多く述べられている。

文化庁 2018『埋蔵文化財の活用と地域研究』

おわりに

「石棒クラブは、石棒を用いて飛騨市が良くなる未来に胸を膨らませている」。これが原動力となって、参加者も感化され楽しんでいる飛騨市の埋蔵文化財活用の体制と手段について述べた（図 14・15）。

すなわち、飛騨市の埋蔵文化財に関わりたい方を全国から募る。関連して取得したデータは商用・非商用に関わらず自由に使うことができる状態で公開する。そして、このように埋蔵文化財データを取得・公開する体制と手段が、飛騨市の認知度を向上させて文化財を継承する地域社会を持続可能にすると認識している。

埋蔵文化財は各地に普遍的に存在するなかで、活用に関しては「従来の方法にとらわれることなく（中略）独自の取り組みを模索していくことが求められる」²¹とされ、「国民共有の財産としていかに将来へと継承していくかを考えるのも、各地域の地方公共団体とともに、発掘調査にかかわった者が果たすべき重要な役割」²²とされている。飛騨市では、発掘調査と報告書刊行で明らかとなった埋蔵文化財の迫力を、飛騨市の魅力として将来にわたって全国の方を感動させ続けることができるよう、体制と手段、評価の在り方をこれからも模索していきたい。

この背景には、冒頭で述べたように飛騨市の人口減少が全国の 30 年先をいくという課題がある。分かりやすい例を紹介すると、今回の実践の舞台である飛騨みやがわ考古民俗館では、管理人を募集しても応募がないことが一因で年間 30 日しか開館できていない。おそらく近い将来、このような状況を迎える自治体等が他にも出てくるはずである。飛騨市は課題先進地として、埋蔵文化財のオンライン活用を推進する意義に向き合っている意識がある。

今後も埋蔵文化財の活用を通じて飛騨市のファンを増やし、人口減少先進地という社会的な課題の解決にも貢献していきたい。

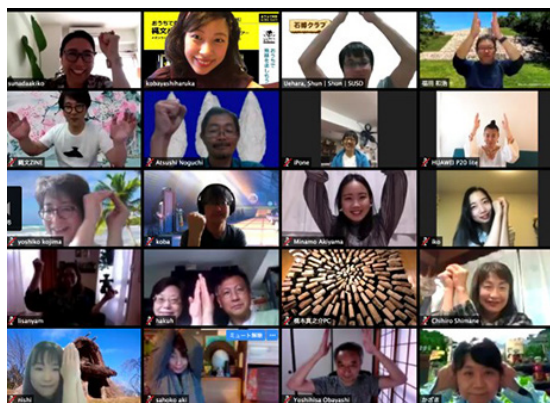


図 14 オンラインツアーでの参加者の笑顔



図 15 バックヤードツアー参加者が石棒を観察

²¹ 文化庁 2013『発掘調査のてびき—各種遺跡調査編—』、329 頁。

²² 前掲 21、407 頁。

埋蔵文化財を広め親しんでもらうための取組み

近沢 恒典・原 栄子（宮崎県都城市教育委員会）

はじめに

都城市では、発掘調査で蓄積されてきた成果を活用するため、平成 22 年度から小中学校へ
の出前授業や各種体験学習会など様々な取組みからなる「埋蔵文化財保存活用整備事業」を実
施してきた。また、平成 25 年度からは動画を活用した情報発信にも取り組んできた。今回、
その活動内容について報告する。

1. 都城市の立地と環境

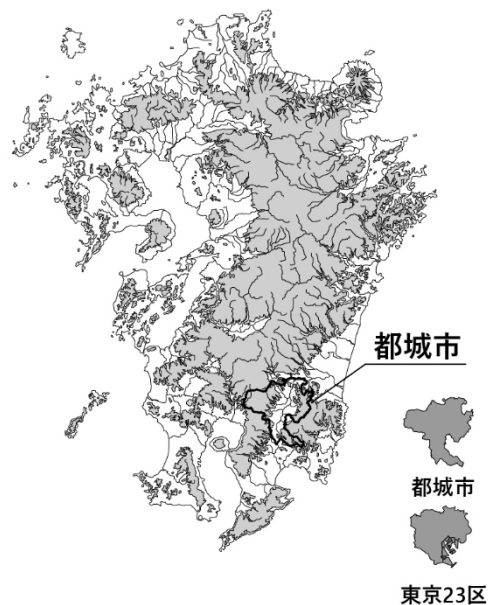
都城市は九州南部内陸部に形成された霧島火山群の東南のふもとに広がる都城盆地にあり、
鹿児島県との県境にあたる宮崎県西部に位置している。南北に細長い都城盆地の周縁には、霧
島高千穂峰の標高 1,573m を最高点として標高 400m 程度の山地が連なり、南は大隅半島に
向けてわずかに開口する。近隣火山群の強い影響の下、シラス台地などの火山噴出物起源の地
形形成が発達している。

都城市は東西 36km、南北 36km、面積約 653 平方 km と周縁山地を含む盆地の大半を占め
る。面積的には東京 23 区とほぼ同規模であるが、人口規模は約 16 万 3 千人である。令和元
年度の予算総額は約 1,007 億円で、歳入の特色には近年人気を集める「ふるさと納税」があり、
年間約 100 億円の歳入をもたらしている。

文化財行政の担当課としては、指定文化財を含めた文化財全般・埋蔵文化財・歴史資料館を
管轄する文化財課、都城島津家から寄贈された資料の保管・展示を主業務とする都城島津邸（都
城島津伝承館）、美術館があり、民俗芸能関係は市長部局のコミュニティ文化課が担当してい
る。博物館系施設には美術館・歴史資料館・都城
島津伝承館・高城郷土資料館・山之口麓文弥節人
形浄瑠璃資料館があり、平成 30 年度の年間入館
者数は、美術館約 31,700 人、歴史資料館約 8,800
人、都城島津伝承館約 20,000 人、高城郷土資料
館約 2,700 人、山之口麓文弥節人形浄瑠璃資料
館約 2,600 人である。なお、学校には小学校 38
校・中学校 20 校・高等学校 8 校・特別支援学校
2 校・専修学校 7 校・高等専門学校 1 校・大学 1
校があり、小学校の児童数は約 9,500 人、中学
校の生徒数は約 4,500 人である。

文化財課は職員 12 名の体制である。埋蔵文化
財担当は職員 7 名であり、主として調査に携わ
る者 6 名、活用事業を主とする者 1 名となっ
ている。

都城市における周知の埋蔵文化財包蔵地は約



都城市の位置

1,500箇所が登録されている。令和元年度（平成31年度）の開発等に伴う包蔵地の照会件数は約400件あり、80件の試掘・確認調査を実施した。文化財保護法に基づく工事届・通知は、それぞれ70件、15件を宮崎県教育委員会へ進達した。本調査は地下式横穴墓の不時発見に伴う緊急調査を含めた2件であり、3冊の発掘調査報告書を刊行した。

都城の地域史は、九州南部内陸の山間部にあつて薩摩半島・大隅半島・宮崎平野部との結節点にあたる地理的環境を背景として展開する。現在までに約350地点で開発に伴う発掘調査等を実施しており、多くの調査成果が蓄積されている。

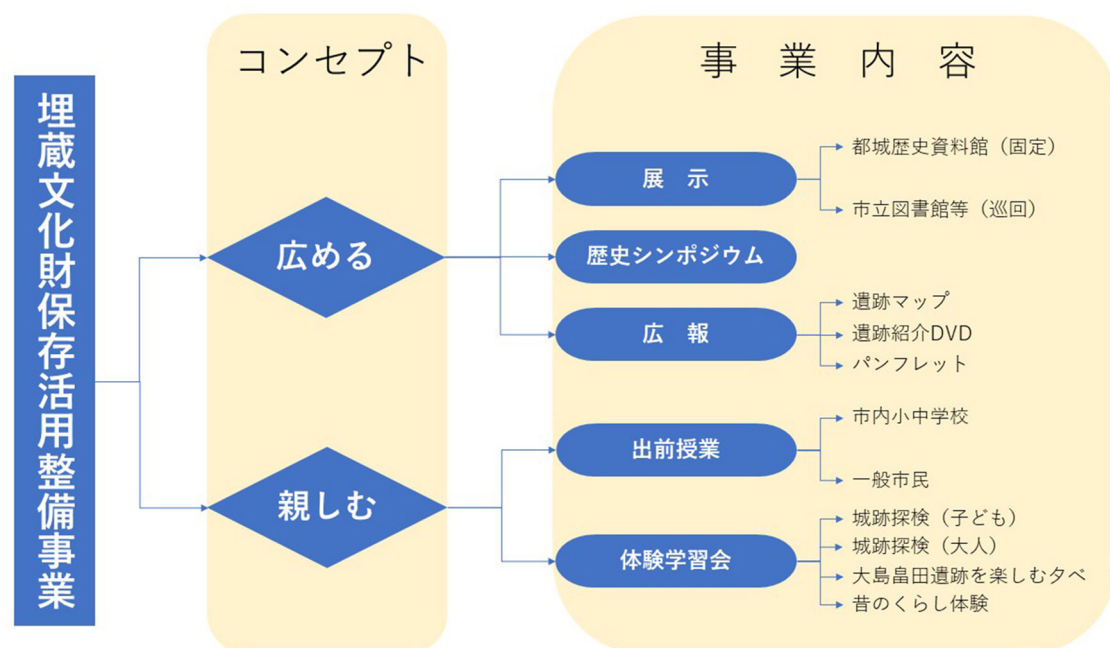
旧石器時代の資料は少ないものの、縄文時代に入ると草創期の集落跡である王子山遺跡、後期集落遺跡の山城第1遺跡、晩期水田跡の坂元A遺跡など多くの事例があり、弥生時代では環濠集落と考えられる高田遺跡を始め、多数の調査を数えることができる。前方後円墳と地下式横穴墓の併存を特徴とする古墳時代では、50基を超える地下式横穴墓の調査を実施している。日向国諸県郡に属し、熊襲・隼人に対する前線地から島津荘の成立拠点域へと至る奈良・平安時代では、在地有力者の居宅跡とされる国指定史跡大島畠田遺跡を代表とし、在地の様相の強い肱穴遺跡や公的性格がうかがえる真米田遺跡など、数種の類型化が可能となる数の調査例が蓄積されている。島津荘の下司職が始祖とされる島津氏とそこから分かれた北郷氏（都城島津）を軸に展開する鎌倉・室町時代では、鎌倉時代の居館跡の加治屋B遺跡、南九州型城郭「都城跡」などが上げられる。鹿児島藩にあつて都城島津家の私領と藩の直轄地が並存していた江戸時代では、近世の町場である中町遺跡、天神遺跡などがあり、軍都として発展し、特攻基地もおかれた近現代では、飛行場跡の確認調査や市内各所の発掘調査で確認された防空壕跡などの調査事例がある。

2. 埋蔵文化財保存活用整備事業の概要

都城市では、平成18年1月の1市4町（都城市、山之口町、高城町、山田町、高崎町）の合併により誕生した新市の今後の行政運営の指針として、平成20年に都城市総合計画を策定した。基本構想としては、都市目標像として「市民の願いがかなう南九州のリーディングシティ」を謳い、まちづくりの基本理念には4つの柱を提示した。そのうちの一つである「ゆたかな心が育つまち」の下位の目標として、「人と人とがふれあい、磨きあう、心ゆたかなまちづくり」を掲げ、その中の基本施策の一つに「歴史と地域文化資源の継承」があり、郷土の歴史を伝え、郷土に対する愛着を深めることや文化遺産の活用と保存に努めるべく、各種の文化財保護事業に取り組んでいる。

平成19年に文化庁より「埋蔵文化財の保存と活用について」の通知が出され、全国的にも保存活用の動きが活発となった。本市においても、それ以前から小規模ではあるものの、体験学習会や出前授業を行ってきたが、この通知を受けて「埋蔵文化財保存活用整備事業」計画案を作成し、平成22年度より事業として本格化させ、現在に至るまで継続して実施している。

平成22年の計画案は、実施目的に「出土品の活用を通して郷土の歴史に直接触れることで、先祖が守り抜いてきた自然・風土の素晴らしさ、資源の大切さ、『都城らしさ』について考え、郷土愛の高揚を目指す」ことを掲げ、「体験学習会等事業」・「広報資料作成事業」・「活用のための再整理事業」の3つの柱のもと、体験学習会や授業サポート、企画展などのメニューで構成されていた。これらのメニューは、利用者の減少による休止や新企画の追加などを経つつも、大幅な変更はなく現在まで継続している。大きく発展したメニューとしては、小中学校へ



埋蔵文化財保存活用整備事業内容

の授業サポート（出前授業）が上げられる。この取り組みは、当初、学校への浸透が図られず、申込校数もわずかという状況であった。そのため、校長会での事業の趣旨説明や、学校に配布する案内パンフレットの表紙に古代服を着て土器をもった教育長の写真と「教育長のオススメ」といったセリフを掲載するなどの周知に努め、申込校数の増加へとつながってきた。

そして事業開始から10年が経過する現在、「埋蔵文化財を広める」、「埋蔵文化財に親しむ」という大きく2つのコンセプトを掲げている。重複するものもあるが、広める取組みとして展示・講演会・広報資料作成、親しむ取組みとして出前授業・体験学習会があげられる。

埋蔵文化財保存活用整備事業の担当は主に職員1名、会計年度任用職員（整理作業員）3名で行っており、体験学習会や大規模校の出前授業では、他職員の協力をえて行っている。

3. 取組み内容の詳細と成果

次に埋蔵文化財保存活用整備事業の具体的な取組み内容についてコンセプトごとに紹介し、併せてこれまでの成果についても紹介する。

（1）広める取組みについて

①展 示

展示については、企画展示と巡回展示の2種類を実施している。

企画展示は、都城歴史資料館において年に1～2回開催している。ターゲットは歴史の授業が始まる小学6年生であり、子どもから大人まで地域の歴史に興味を持ってもらうことを目的としている。これまでの取組みとして、子どもでも楽しんで展示を見てもらえるよう、埋蔵文化財担当職員が縄文人や弥生人にコスプレをしたパネルをケース内に展示して当時の人々の暮らしの様子を再現したり、ケース内に古墳（地下式横穴墓）の玄室を再現して、ケースの外側から玄室内部がのぞける仕掛けを作ったりといった工夫を行っている。

巡回展示は、市内の各公共施設において、年4回程度開催しており、各展示期間は2週間～1ヶ月程度である。ターゲットは展示目的以外で開催場所に訪れた人々であり、歴史に興味がない人でも施設に来た際に気軽に地域の歴史に触れることができることを目的とするため、来館者の興味をかきたてる展示となるような工夫をしている。



発掘現場再現模型（令和2年度）

巡回展示の開催施設の一つに中心

市街地の空き店舗をリニューアルした新市立図書館（Mallmall）がある。この図書館は利便性の高い立地と利用のしやすさから非常に人気を集めており、平成30年度の入館者数は約110万人に上る。平成30年度の展示では中世城館をテーマとし、説明パネルや出土品の展示に加えて、甲冑姿や直垂姿の顔出しパネルを設置した。今年度の巡回展では、実際の縄文早期層の土を持ち込み、等身大の人形で測量や包含層掘削などの発掘調査現場の再現模型を展示した。当初はその土を利用して発掘体験ワークショップを行う予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった。また、この他にも3m×3mの大きさで上に乗って見ることができる市内地形図を作製しており、その時のテーマや時代で紹介したい遺跡の調査地点等を示している。

今年度の図書館での巡回展では、発掘現場再現模型が建物の外からでも目にする事ができたため、図書館前を通る人々の興味関心を惹きつけるきっかけとなり、これまで遺跡や発掘調査のことを知らなかった人々から多くの感想をもらうこともできた。上に乗って見られる地形図は、子どもたちの興味を惹きつけるための工夫であり、実際に「学校の近くにも遺跡があることを知って驚いた」などの感想もあった。また、図書館での開催では、巡回展示中に図書館側が関連図書展示を同時開催しており、児童書から一般書まで幅広く関連図書が展示されている。これも巡回展に興味を持つきっかけとなっている可能性は高い。

そのほかの巡回展会場では、場所の確保の面からの制限等もあり、規模を縮小して展示する場合もある。

②講演会（歴史シンポジウム）

毎年、各時代や歴史的テーマに基づいて外部講師を招聘して開催している。前半は講師による基調講演、後半は都城の歴史について掘り下げていくシンポジウム形式で実施している。ターゲットは歴史に興味がある一般市民であり、より深く歴史への知識や理解を深めることを目的としている。シンポジウムに合わせて巡回展も同時開催しており、講演だけでなく、出土品からも知識を深めることができるようにしている。古墳時代をテーマとした昨年度は、初の試みとして、都城の古墳時代を紹介する動画を作成し、講演会への導入として最初に上映したほか、地下式横穴墓のVR体験を実施した。

講演会は、参加人数からはその成果を見ることは難しい。参加者はリピーターが多く固定客はついているものの、新規参加者を獲得することに苦慮している。

その中で参加人数の集計から関心の高さが伺えるのは、国史跡大島畠田遺跡に関するものと、古墳に関するものである。この2つに関連する講演会は100名を超える参加があり、一方で縄文時代などは参加者が少ない傾向がみられる。

③広報資料作成

地域の遺跡について知ってもらうために様々な広報資料を作成している。

ア ふるさとブラブラ遺跡マップ

市内の主な遺跡を12地区に分けて地図や調査写真を使用して紹介しており、マップを片手に遺跡や史跡巡りができる資料である。

イ 遺跡紹介ソフト（DVD）

「むかし昔の都城」というタイトルで、縄文時代編・弥生時代編・古墳時代編・古代編・ダイジェスト版の5つを作成している。市内小中学校に社会の教材として配布しており、授業等での活用を促している。

ウ 国指定史跡大島畠田遺跡パンフレット

平安時代の地方有力者の居館跡である大島畠田遺跡は、平成14年に国指定史跡となり、平成29年7月に歴史公園として供用開始された。平成24年には遺跡がある校区の小学校の郷土研究クラブと協同し、出前授業で遺跡の勉強をしながらパンフレットの作成を行った。その後改定を行い、公園内だけでなく市役所等で無料配布して周知を図っている。

エ 絵本

歴史を学び始める前の子どもたちにも地域の歴史に触れてもらうことを目的として、都城の歴史を題材とした絵本『むかしむかしのみやこんじょ』を作成した。職員が分担



歴史シンポジウム（令和元年度）



遺跡マップ



遺跡紹介ソフト



マイブンひろめ隊カード

して各時代の文章を作成し、イラストは早川和子氏に依頼した。市内小学校・図書館・児童館等に配布したほか、体験学習会などで読み聞かせも行っている。

オ マイブンひろめ隊カード

都城市マイブンキャラクター「たむたむ」・「いそいちくん」を使って作成しており、出前授業や体験学習会に参加した子どもたちに配布している。出前授業や体験学習会の参加、歴史資料館に来館することでポイント(スタンプ)を獲得することができ、3ポイント獲得すると歴史資料館でプレゼントをもらうことができる仕組みとなっている。

(2) 親しむ取組みについて

① 出前授業

市内の小中学校を対象に、職員が講師となり、教科書には掲載されていない地域の歴史についての紹介を行う。自分たちが住む地域の歴史への興味・関心を育てることを目的としており、校区内や校区周辺などの身近な場所に残る遺跡の紹介や、そこから出土した土器や石器等に直接触れる体験を中心に授業を構成している。また、説明や写真ではわかりにくい遺構の大きさや構造などの理解を促すため、市内で調査された実際の竪穴住居や地下式横穴墓の原寸模型を持ち込み、子ども達に遺構を体感してもらう取り組みも行っている。さらに、親しみやすさの演出のため、職員が縄文服や貫頭衣、官人服などのコスプレをして授業を行う場合もある。

こうした取組みは小中学校だけでなく一般向けにも実施しており、主に高齢者学級からの依頼が多い。



土器にふれる子ども達 (令和2年度)



縄文人にコスプレした職員 (令和2年度)

出前授業の導入校は、初年度はわずか4校であったが、令和元年度は30校にまで増加し、全57回、のべ2,615名の参加があった。実施例として最も多いのは、歴史学習の導入として縄文時代～古墳時代を紹介する内容である。実施時期も1学期の5～6月が最も多く、学校の授業の復習も兼ねてその時代の地域の様子などを紹介している。

実際に授業を受けた教員や子どもたちからは、歴史に興味はなかったけれど出前授業を受けたことで興味関心を持つことができたという声をもらうなど、非常に好評である。

②体験学習会

地域の歴史や昔の人々のくらしに興味をもってもらうことを目的として、季節毎に体験学習会を開催している。

ア 春季体験学習会(子ども向け城跡探検)

市名の由来とされる中世の山城「都城跡」の周知を目的として、平成27年度より毎年4月末～5月初旬に開催している。「いざ！春の陣」という名称で、紙やプラ紙で作製したよろいを着用し、武将になりきって城跡探検を行う。弓矢やつぶて投げなどの体験だけでなく、城跡を歩きながら「都城跡」の特徴や山城の構造なども紹介する。



武将とのチャンバラ対決（令和元年度）

イ 夏季体験学習会

夏休み期間に歴史資料館で開催するもので、開催中の企画展見学も含めて、昔の暮らし体験として火起こしや勾玉作り等を行っている。災害をテーマとした企画展示を行った平成28年度には、都城の地層模型を作成する体験を行った。



大島畠田遺跡を楽しむ夕べ（令和2年度）

ウ 秋季体験学習会（大島畠田遺跡を楽しむ夕べ）

国指定史跡大島畠田遺跡歴史公園にて遺跡を知ってもらうことを目的に令和元年度より開催している。公園内で史跡見学を行ったのち、平安時代の暮らしを体験する。体験メニューとしては、墨書土器作りや火打ち石と火打ち金を使った火起こし体験を行っている。夕方から夜間にかけての体験学習会であるため保護者同伴としており、子どもだけでなく保護者も夢中



冬季体験学習会（平成29年度）

になっている姿が見られ、親子で行う体験学習会という色合いが強い。

エ 冬季体験学習会（大人向け城跡探検）

市内の城跡を紹介する大人向けのイベントである。古絵図を片手に城跡を散策しながら、城の構造などについて解説する。平成 27 年度より実施しているが、近年は都城跡の確認調査を行っていたことから、確認調査トレンチをそのまま見学するなど、最新の調査成果の紹介も交えたイベントとなっている。

これらの体験学習会は、参加者からの評価も高く、参加希望者も多い。春の陣は毎年ゴールデンウィーク初日に開催しており、初年度である平成 27 年度は参加者 49 名であったが、現在では 100 名の募集に対して、申込開始 2～3 日でほぼ定員に達する人気イベントとなっており、リピーターも多い。兄弟での参加も増加しており、未就学児が兄弟の様子を見て小学校に上がって参加することを楽しみにしている姿も見受けられる。また、体験は子どもを対象としているが、多くの保護者も同行するため、保護者世代への広報活動にもつながっている。

大島島田遺跡の体験学習会は開始して 2 年であるが、昨年度よりも今年度の参加者は増加しており、関心の高さが伺える。体験学習は子どもを対象としているが、火起こしは同伴している保護者も夢中になって体験する様子が見て取れ、今年度はコロナ禍でイベントが少ない中、親子で体験ができる貴重な機会となった。

冬の陣は毎年 2～3 月に実施しており、市内のみならず市外や隣県の鹿児島県からの参加者も見受けられる。歴史好きの参加者が多いと見られるが、市内に居住していても本丸（現在歴史資料館が建っている場所）以外は知らないという市民も多く、毎年好評を得ている。また、実際に土塁や空堀などの城の構造が残存している状況を目にすることで、「このような文化財を壊さずに残して欲しい」といった要望の声も上がるなど、市民の文化財保護意識の醸成にもつながってきていると考えられる。

4. 動画について

「埋蔵文化財を広める」、「埋蔵文化財に親しむ」を目指す取り組みの中で、より一層の「広がり」と「親しみやすさ」を導くツールとして、前節で紹介したコスプレや遺構の原寸大模型などとともに、動画を用いた情報発信を行ってきた。これまでに作成した動画は 67 本あり、授業支援を目的とした DVD ソフト 5 本、広報を目的とした動画 60 本、歴史資料館やシンポジウムでの使用を目的としたもの 2 本にわけられる。

DVD ソフトは、前節でも取り上げたが、「むかし昔の都城」というタイトルで縄文時代編・弥生時代編・古墳時代編・古代編・ダイジェスト版の 5 本を作成した。授業支援を目的として、発掘調査の成果をもとに、各時代における様々な項目をチャプターで配列している。職員がシナリオ、パワーポイントによるイメージ映像、遺跡・遺物等の写真を準備し、それをもとに委託業者が動画を作成した。「ハカセ」と「アヤメちゃん」、「みやこちゃん」などのキャラクターの会話によって解説を進めるなど、子ども達への親しみやすさとわかりやすさを目指した演出となっている。

広報用動画作成は、『「都城の歴史」解説動画』を柱に年間 20 本の動画作成を計画した「文化財課広報動画コンテンツ充実事業」（平成 25 年度・0 円予算）に始まる。これ以降、企画展や歴史シンポジウムの広報、発掘調査現場の紹介、広報誌に連載した史跡・遺跡を紹介する歴史コラムの動画版、職員採用試験の案内などと多岐にわたるコンテンツの作成を続けている。

表 1 都城市文化財広報用動画コンテンツ

No,	名称	カテゴリ	時代	公開日	再生回数		備考
					YouTube	Facebook	
1	都城歴史資料館体験学習「いざ！ 春の陣〜武将になって城跡探検〜」	イベント	中世	2015/5/12	280	-	
2	都城歴史資料館企画展「『都城』ができるまで」	企画展	中世	2015/5/20	231	-	
3	中町遺跡 01	発掘調査	近世	2015/6/1	319	2,043	中心市街地再開発
4	ぼんちくんと歴史探検「都城県印」	文化財	近代	2015/6/10	375	1,063	
5	中町遺跡 02	発掘調査	近世	2015/6/22	198	1,185	
6	ぼんちくんと歴史探検「手向山式土器の壺」	文化財	縄文	2015/7/1	141	690	
7	ぼんちくんと歴史探検「8月6日 都城大空襲」	文化財	戦争関連	2015/7/30	2,726	2,062	戦争関連
8	巡回企画展「戦国時代の都城」	企画展	中世	2015/8/5	44	534	
9	中町遺跡発掘調査 03	発掘調査	近世	2015/8/20	256	941	
10	ぼんちくんと歴史探検「都城址」	文化財	中世	2015/9/5	-	907	
11	中町遺跡発掘調査 その4	発掘調査	近世	2015/9/11	257	1,225	
12	中町発掘調査 その5	発掘調査	近世	2015/9/30	176	856	
13	巡回企画展「戦国時代の都城」	企画展	中世	2015/10/9	238	639	
14	中町遺跡発掘調査 その6	発掘調査	近世	2015/10/14	363	770	
15	都城歴史資料館 終戦70年企画展「近代戦争と都城」	企画展	戦争関連	2015/10/23	401	976	
16	中町遺跡発掘調査 その7	発掘調査	近世	2015/11/6	675	1,092	
17	ぼんちくんと歴史探検「大島畠田遺跡」	文化財	古代	2015/11/9	291	947	
18	ぼんちくんと歴史探検「都城跡出土の焼き物たち」	文化財	中世	2015/11/9	110	646	
19	ぼんちくんと歴史探検「五十市式縄文土器」	文化財	縄文	2015/12/9	260	590	
20	菓子野地下式横穴墓群 2007-1号	発掘調査	古墳	2015/12/28	843	-	
21	都城歴史資料館企画展「むかしもの道具展〜これってなあに？〜」	企画展	近現代	2016/1/26	1,698	1,197	
22	ぼんちくんと歴史探検「消えた都城湖」	文化財	-	2016/5/6	4,292	5,000	
23	ぼんちくんと歴史探検「縄文時代の巨大地震」	文化財	縄文	2016/6/10	462	1,786	
24	ぼんちくんと歴史探検「縄文時代のお墓」	文化財	縄文	2016/7/22	359	1,123	
25	ぼんちくんと歴史探検「都城空襲と携帯用防空サイレン」	文化財	戦争関連	2016/8/3	775	1,983	
26	都元西原遺跡現地説明会(9月17日・土曜日)	発掘調査	古代	2016/9/12	259	4,617	新聞報道等で話題
27	都城歴史資料館企画展「刀展」	企画展	近世	2016/11/18	265	796	
28	ぼんちくんと歴史探検「白山原遺跡出土の木製品」	文化財	中世	2016/11/28	151	1,278	
29	ぼんちくんと歴史探検「脇差(銘:日州正次)」	文化財	中世	2016/12/2	99	892	
30	ぼんちくんと歴史探検「国内最古級の水田跡」	文化財	縄文	2017/6/1	216	1,480	
31	ぼんちくんと歴史探検「大型商業施設の下に眠る弥生の集落(高田遺跡)」	文化財	弥生	2017/6/21	102	1,611	
32	都城歴史資料館企画展「『絵本 都城の歴史』の世界」	企画展	-	2017/6/29	-	1,689	
33	土角遺跡発掘調査	発掘調査	弥生	2017/9/5	-	1,653	
34	白山原遺跡第4次発掘調査が始まりました	発掘調査	縄文	2017/10/31	182	1,306	
35	都城歴史資料館企画展「大島畠田遺跡から島津荘へ」	企画展	古代	2017/12/8	113	770	
36	都城歴史資料館企画展「戊辰・西南 二つの内戦と都城」	企画展	近代	2017/12/8	270	860	
37	歴史シンポジウム「大島畠田遺跡から島津荘へ」	イベント	古代	2017/12/22	159	1,376	
38	都城市 一般行政職(埋蔵文化財)採用試験があります！	その他	-	2018/4/24	143	4,284	職員採用
39	巡回企画展「館から城へ」	企画展	中世	2018/8/6	83	1,284	
40	都城歴史資料館企画展「知らざる文化財」	企画展	-	2018/9/21	115	796	
41	大島畠田遺跡	文化財	古代	2018/11/7	100	-	
42	大島畠田遺跡歴史公園	文化財	古代	2018/11/7	139	-	
43	都城歴史資料館企画展「西南戦争」	企画展	近代	2018/11/19	695	1,151	
44	都城歴史資料館企画展「時代は巡る〜ちよつと昔の道具とお金〜」	企画展	近現代	2019/2/14	198	729	
45	都城教育の日 推進事業「幕末の英雄-その子孫が語る-」(シンポジウム)	イベント	近代	2019/2/22	-	1,125	
46	都城歴史資料館企画展「刀 to 鏡〜inisienobi〜」	企画展	近世	2019/4/3	217	1,109	
47	都城歴史資料館企画展「眠りからさめた王さまたち」	企画展	古墳	2019/4/26	200	1,552	
48	都城歴史資料館ナイトミュージアム	イベント	-	2019/7/2	210	1,225	
49	都城歴史資料館ナイトミュージアム ver2	イベント	-	2019/7/14	-	1,025	
50	R1体験・ワークショップ(古墳時代バージョン)	イベント	古墳	2019/7/24	74	811	
51	都城歴史資料館企画展「みやこのじょう歴史散歩」	企画展	-	2019/9/24	167	-	
52	大島畠田遺跡を楽しむタベ	イベント	古代	2019/9/27	83	1,006	
53	歴史シンポジウム「古墳をつくった人々」	イベント	古墳	2020/1/24	396	564	
54	都城歴史資料館企画展「昭和・平成タイムトラベル」	企画展	近現代	2020/2/19	159	776	
55	令和2年度都城市職員採用試験一般行政職(埋蔵文化財)募集のご案内	その他	-	2020/3/30	276	2,346	職員採用
56	巡回企画展「のぞいてみよう！ まいぶんの世界〜発掘調査の最前線〜」	企画展	-	2020/7/20	218	-	
57	都城歴史資料館企画展「あの日々をわすれない」	企画展	戦争関連	2020/8/6	377	-	
58	都城歴史資料館企画展「みやこんじょのお宝発掘！」	企画展	-	2020/9/16	210	971	
59	2020 都城歴史資料館リニューアル 第2弾	その他	-	2020/11/27	211	-	
60	歴史シンポジウム「掘る、活かす、つなぐ。〜発掘調査と活用の最前線〜」	イベント	-	2020/12/24	55	-	
				計	21,912	67,337	
				平均	398	1,347	

内訳は表 1 のとおりである。

歴史資料館・シンポジウムのために作成した動画は、都城の歴史やシンポジウムのテーマを簡単に紹介することを目的としている。

動画の作成は、文化財課職員がデジタルカメラを使用して撮影し、パソコンで編集する方法をとっている。デジタルカメラもパソコンも発掘調査・報告書作成用として導入した汎用品である。編集ソフトは、当初は Windows movie maker を使用していたが、現在は AviUtl を使用している。AviUtl は無



動画：ぼんちくんと歴史探検『消えた都城湖』

料で配布されている動画編集ソフトであり、基本的な動画編集に加え、プラグインを追加することで様々なエフェクトを適用させることができる。また、使用者も多く、導入・設定から使用方法に至るまで、web 上に丁寧な解説記事・動画が多数上げられているという利点もある。ただ、報告書作成用として AdobeCC が導入されている組織であれば、動画編集ソフト「Premiere Pro」が使用できる。BGM は著作権フリー BGM を使用している。ナレーションを入れる場合は職員が行い、庁舎内の静かな場所で録音するほか、図書館の音記録音ブースを利用する場合もある。

Web へのアップロードは、都城市秘書広報課が管理する YouTube の都城市公式動画アカウント「動画都城市」を利用し、そこから市ホームページへの埋め込みを行うほか、Facebook の都城市アカウントにも掲載している。

動画が持つ特色としては、静止画に比べ情報量が多い点が上げられる。作成した動画においても、静止画では難しい臨場感を感じさせる発掘調査現場の紹介（中町遺跡・土角遺跡など）や簡単なコンピュータグラフィックスによる再現（ぼんちくんと歴史探検『消えた都城湖』）など、動画の特性を活かしたものの再生回数が多い傾向がうかがえる。

また、インターネットでの動画を用いた情報発信は、不特定多数の人々への情報の拡散が期待される。だが、再生回数を見ると YouTube では平均 398 回、Facebook 平均 1,347 回と決して多くはなく、これからの課題といえる。

おわりに

都城市では、平成 22 年度より「埋蔵文化財保存活用整備事業」を開始し、近年は「埋蔵文化財を広める」、「埋蔵文化財に親しむ」という大きな 2 つのコンセプトのもとで様々な取り組みを実践してきた。また、平成 25 年度からは動画を活用した情報発信にも取り組んできた。

約 8 割の小学校が利用するまでに成長した出前授業や申し込み開始日から数日で定員に達し、キャンセル待ちの希望が連なる各種体験学習会など、埋蔵文化財を活用し地域の歴史を考える取り組みは着実な成果を上げてきたといえる。動画に関しては、多くの課題を抱えているが、シンポジウムでの上映などで活用の幅を広げているほか、文化財動画ライブラリーの稼働など、web 上での環境整備も進められるなどの追い風もあり、今後も情報発信を続けていきたいと考えている。